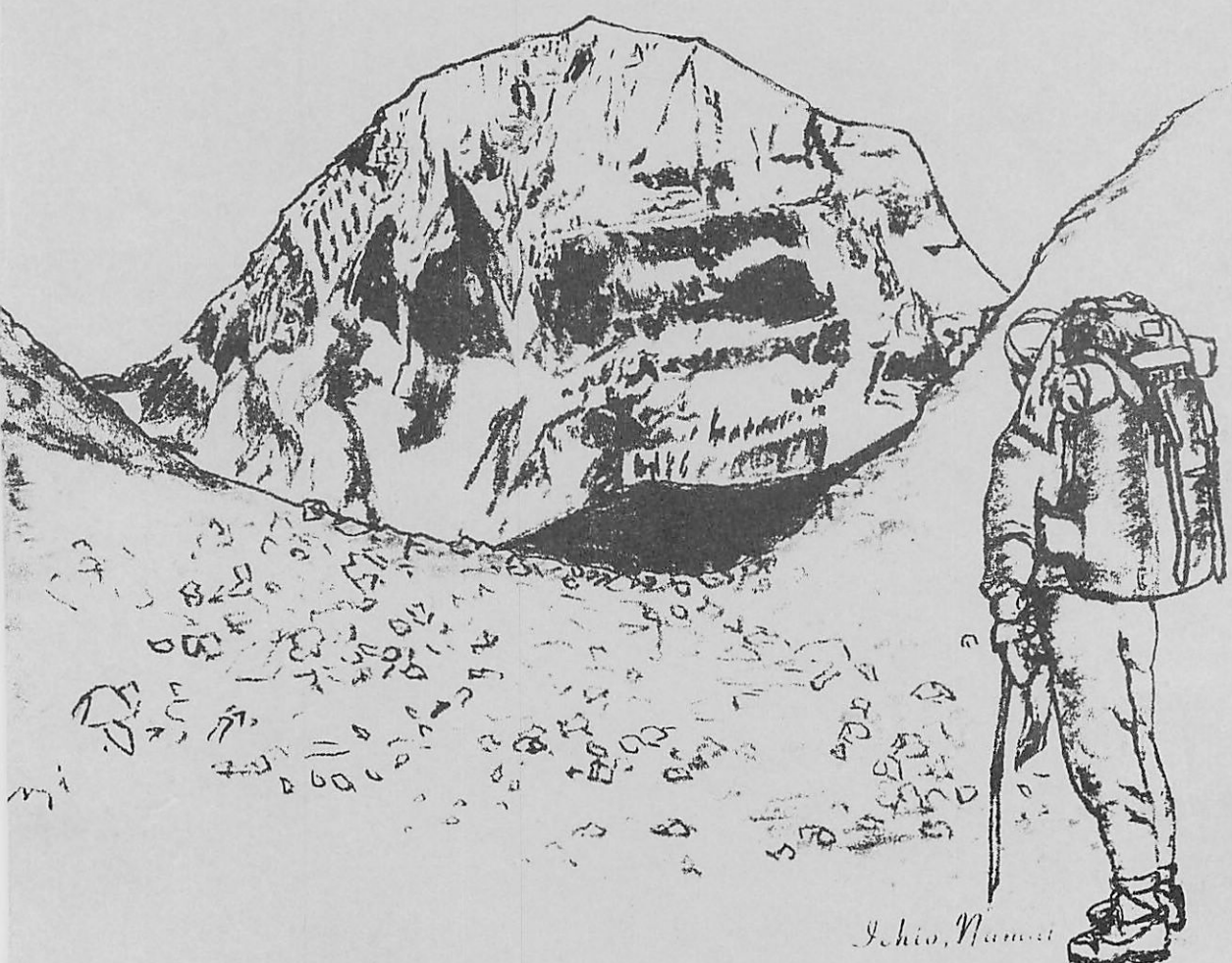


R&V

18号

1995年

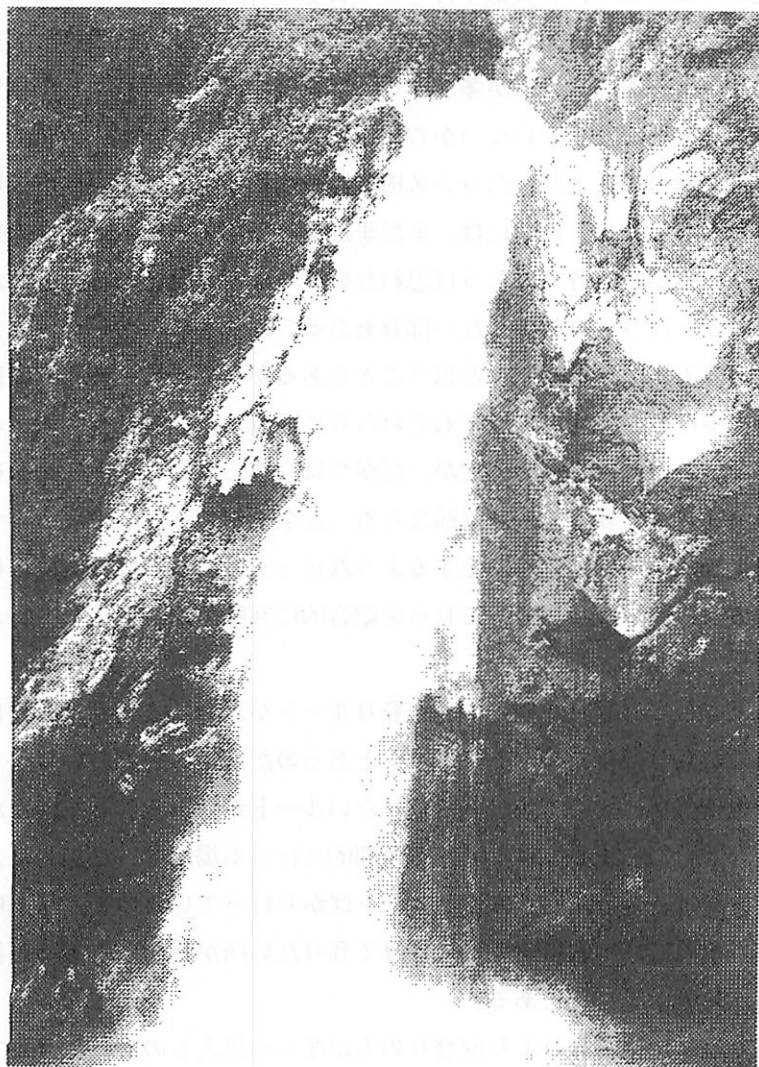
夏号7月～9月



Ichio, Namai

R & V

18号



《 photo by motozu 》

95 年' 夏 ACC-J 茨城

《剣大滝 | 滝》

沢ボケ

私はACC-Jに入会以来、ずっと岩登り主体の山行をしてきた。しかし、最近山行形態が変わってしまい、ここ数年めっきり岩登りの回数が減ってしまった。冬は雪稜登攀かスキー、たまに氷瀑登攀が入る位で、いわゆる冬壁の登攀はなくなってしまった。夏は岩登りより沢登りの方が多くなり、あれほど岩に執着してきた自分がウソのようである。その理由としていくつか考えられる。

まず第1に登攀力の低下だ。バランス機能の衰退、筋力の低下、体重の増加などの原因によるものだろう。会員達には、まだまだ行けますよとか、どこでも登れますよとかおだてられるが、自分ではそうは思わない。ではどんなところでそれがわかるんだと聞かれると、はっきりわからない部分もある。はっきりわからない部分があるということは、俺もまだ登れるかなと思うこともあるからである。皆と一緒に山行してもそれなりに歩けるし、岩を登ってもそれなりに登れる。それじゃ登攀力の低下なんてないじゃないかと反論されそうだが、だがやはりあると言わざるをえない。まずあるグレードのピッチを登っても、以前ならもっと余裕があったはずなのに今はない。垂直の木登りみたいな腕力を必要とするようなピッチは、以前は一気に行けたのに今は何回も休まなければ登れない。これらを総合的に判断すると低下していると認めざるを得ないのだ。

第2に、どうしても登りたいという岩登りルートがない。と言うとウソになる。登りたかったのに登り残したルートはゴマンとあるのだから、登りたいルートはたくさんあるが、現在の私に登れるルートで登りたいルートがないと言ったほうが正しい。いやまてよ。それでも正しくはないか。時間的に行ける場所で、を加えた方がよい。だからここ数年は、登ったことのあるルートばかり行っているの、新鮮味がなくなってしまった。それに比べ沢は時間的に行けて登りたい所がたくさんある。挑戦してみたいゴルジュや滝がゴマンとある。

第3は、今の私には岩登りより沢登りの方が楽しく思えるので、どうしても足が沢に向いてしまう。決して岩登りに飽きたり、岩登りが嫌いになったわけではない。だって何十回といっているゲレンデに行ってもそれはそれで楽しいのだ。今の私はそれよりも沢登りの持つ寛容的なところに魅力を感じる。岩登りだと既成ルートの場合、決められたルートに登れなければ敗退しかない。自分にはそのルートに登る実力がなかったと挫折感に陥る。そこにボルトでも打とうものなら大変だ。山岳雑誌上であーだこーだと喧々譁々。全国にちらばっている口うるさいクライマーの総いじめをくらう。3

0年前だったか、甲斐駒ヶ岳の赤石沢奥壁左ルンゼが冬期末登の頃、その初登攀争いに当会も入っていた。冬を前にした晩秋、東京H会により、左ルンゼの核心部にフィックスザイルが発見された。ザイルの近くに当会のペナントがあったので、道義的責任問題で当会の名前が山岳雑誌上にだされた。もちろんザイルは当会で張ったものではない（巷ではS会だというウワサがあった）。当会には、そんなことしてまで初登攀したいと思っていた人はいるまい。そのザイルは後日撤去されたそうであるが、ザイルが撤去される直前に登ったパーティの記録速報が出た。その記録には次のような記述があった。我々は問題になったフィックスザイルを横目で見ながらフィックスザイルを使わず登った、と。私はこれを読んで笑ってしまった。俺なら遠慮なく使わせてもらうのによ、と。私はこんなことはどうでもよいという考えだ。ボルトありハーケンありアブミありなんでもありの世界が私は好きなのだ。沢登りで滝を巻いたからって初遡行にならないことはないだろう。滝が登れなくてボルトを打っても山岳雑誌上で叩く奴もいないだろう。フィックスがあればみんな遠慮なく使うだろう。私はこういうところが自分の性にあっていて。所詮、岩登りは自己満足を目指すスポーツだと思うので、チョンボをして登っても満足感は何もないであろう。自分もそういう時期を20年も過ごしてきたので良く理解できる。でも現在の自分は変わってしまった。より速く、より安全に、より楽しく登れば良いというふうに。これも年齢のせいであろうか。

茨城に岩登りのクラブを作ろうをスローガンに作った当会創立会員の私が、このようになってしまったのは、今の若い会員は開いた口が塞がらないであろう。当会は岩登りの会なので合宿は登攀合宿でよい。この沢ボケおじさんの言うことはあまり気にせず、現チーフリーダーを中心に山行計画を進めてほしい。私は今まで通り沢に行かないかと誘うつもりだが、断られても全く気にはしていない。ACC-J（アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン）の名前が如く、当会は岩登りを最優先に考えてよいのである。

（本図一統）

《目次》

1995年 夏号7月～9月

ACC-J 茨城

沢ボケ	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
今早出川・イワナ宴会山行	・・・	6
谷川岳・一の倉沢烏帽子奥壁・変形チムニールート	・・・	8
越後・五頭連峰・三階滝沢	・・・	10
前穂高岳・北尾根4峰正面壁・北条・新村ルート	・・・	14
海谷山塊・不動川廻行	・・・	18
谷川岳・一の倉沢・烏帽子沢奥壁凹状岩壁ルート	・・・	29
笛吹川・ヌク沢左俣右沢廻行	・・・	31
北岳バットレス・ピラミッドフェース～4尾根（継続登攀）	・・・	33
北岳バットレス・下部フランケ～上部フランケ～中央稜	・・・	35
剣沢大滝ルート工作（その1）	・・・	37
谷川岳・赤谷川本谷	・・・	44
奥多摩・川苔谷逆川	・・・	46
裏丹沢・神の川・ミクボ沢	・・・	48
奥秩父・一の瀬川大常木谷～竜喰谷	・・・	50
前穂四峰正面壁・甲南ルート	・・・	52
〇〇氏の山談義【新人紹介】	・・・	55
友好山岳団体の月報・会報紹介	・・・	57
編集後記	・・・	59

*表紙絵……聖なる山“カイラス”北壁を望む編集長

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

【 7月】

7月 5日

出席者 鈴木、古山、菊地、本図、鯉河、生井

7月19日

出席者 本図、佐藤、古山、菊地、坂本、生井、所、笹沢、大崎

【 8月】

8月 2日

出席者 本図、古山、大崎、菊池

8月16日

出席者 本図、古山、大崎、今井、佐藤

8月30日

出席者 本図、木村、古山、菊池、大崎、告、坂本、笹平

【 9月】

9月 13日

出席者 本図、木村、古山、菊池、大崎、告、坂本、笹平

9月27日

出席者 本図、古山、笹平、菊池、今井、生井

山行報告

1995年 7月～9月

【7月】

7月1～2日	早出川釣行	L本図、菊地、他3名
7月13～14日	穂高岳（敗退）	L笹沢
7月15日	谷川岳・烏帽子奥壁変形チムニー	L古山、坂本、告
7月23日	五頭山・三階滝沢	L本図、坂本
7月24～25日	穂高岳・北尾根4峰正面壁 北条・新村ルート～北尾根	L古山、中居
7月28～30日	不動川遡行	L本図、古山、中居
7月30日	谷川岳・烏帽子奥壁凹状岩壁	L佐藤、坂本

【8月】

8月6日	笛吹川・ヌク沢左俣右沢	L本図、古山、佐藤
8月12～15日	夏合宿【北岳バットレス】	L古山、鈴木、告
13日	ピラミッドフェース～4尾根	L古山、鈴木、告
14日	下フランケ～上フランケ～中央稜	L古山、告
8月12～15日	剣大滝	L本図、with 3名（浦和浪漫）
8月19～20日	谷川岳・赤谷川本流	L古山、佐藤
8月20日	奥多摩・川苔谷逆川 【大崎さん歓迎山行】	L本図、今井、笹沢、大崎
8月27日	裏丹沢・神の川ミクボ沢	L本図、古山

【9月】

9月9日	岩トレ・古賀志山	L古山、笹平
9月10日	奥多摩・大常木沢～竜喰沢	L本図、古山
9月14～16日	前穂高・4峰正面壁甲南ルート	今井、他1名
9月15～16日	不動川・上部（敗退）	L本図、坂本、古山
9月17日	岩トレ・船橋ロッキー	L本図、坂本、古山、笹平
9月23日	岩トレ・古河体育館（71-）	L生井、笹平
9月23～24日	不動川・上部	L本図、坂本、古山

今早出川・イワナ宴会山行

1995. 7. 1～3

パーティ L本図一統、菊池三夫、with武藤泰宏、根本憲泰、上村保（水戸葵山岳会）

先週の日曜日は、秋山郷にイワナを釣りに行ったが、釣りどころでは無く、川の中に自分で掘って入れる温泉が有り、それに浸かってのんびりしてしまった。帰りには奥志賀のネマガリダケを夢中でザック一杯採ってきた。何分にもタダで採れるとなるとつい本図氏の真似をしてしまう。

集会で本図氏が『秋山郷でイワナ釣れたかよ』と聞いてきたので『全然釣れねえ』と答えたら、すると『じゃ今週今早出に釣りと宴会をやりに行くべ』と云うことになった。メンバーは今回は宴会山行と云うことで、水戸葵の上村氏、武藤氏、根本氏、と本図氏、私、で本図氏が計画する。

下館21:00集合で出発となり、高速を飛ばし会津坂下へと向かい、御神楽方面室谷部落を目指す。室谷の分岐の所が入り口になるのだが、夜の為林道の川沿いには全然見当たらない為、本図氏が車の外に出て見ると、林道の上の方に新道と部落がある。というので行ってみると、そこには真新しい建物でしかも同時にみんな家を新調しているではないか。13年前本図氏と室谷に来たときは農家特有の建物だったのが、今ではおとぎ話に出てくるような家ばかりであった。ほとんどの家がカラーの屋根、カラーのドア付の家だった。室谷地区は日本でも有数の天然ゼンマイの産地の為、ゼンマイ御殿かな……。

室谷分校が分からないので、空き地で仮眠を取り、早朝近くの子供に分校を訪ねる。本図氏はもう一度老人にも訪ねて確認をする。山では本当にまめである。

小雨が降っていたが林道を歩き始める。昔に来たときよりも道は荒れていた。3時間歩くと二俣になり右側か、左側か迷い、何となく右側ばいなので右側に行くが20分位してから、本図氏がこれは違うと言い、二俣の所まで戻る。さすがは室谷ゼンマイ採りの主だけあって道は匂いで分かるらしい。今度は左側を進み1時間半位でやっと今早出川に着く。時間は午後1時頃であった。小雨がまだ降っており早く幕営地を探し、天幕と焚火の準備をする。終了が4時を回っていた。

これより、今夜のメインであるイワナを釣りに出かける。本図、上村氏が上流へ、武藤氏は下流へと……。雨も降っており、収穫は0匹かと思われたが、そこは情

熱と根性の本図氏（何ぶんにも、イワナを釣り上げないと今夜のおかずは無しとなってしまう。なぜなら調味料しか持参していない為）約2時間で9匹のイワナを釣った。その内の一匹は特大だったので当然刺身にする。あとは1本ずつ塩焼にして、骨酒用のイワナも作り残ったのはみんなイワナ汁で食べた。さすがに天然ものはうまい。アプローチの途中で、ウド及び不明の山菜をポッケに上村氏が採っていたので、これで天ぷらを作る。天ぷらは大量に揚げておき、翌日は天井にして食べる。ビール、酒を次から次へと飲む武藤氏は、典型的なアルパインクライマーで酒は彼一人で一升を空ける。本図氏には酒は3升頼むよ、なんて言っていた程なのでこれもうなずける訳だ。

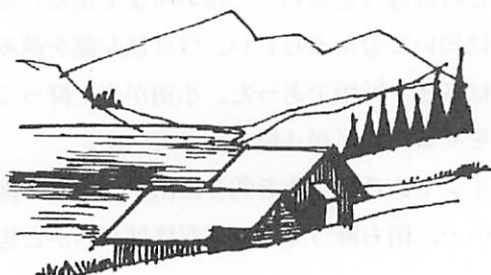
翌日は、早朝上村氏が竿を持って出かけるが“収穫は無し”で戻ってくる。天幕を撤収の頃、テント場隣の枝沢より2人組が下りてきた。釣り師の様だった。姿はかなり熟練者のような感じがした。彼らは私達が先に沢に入っていた為に少しがっかりしていたような気がしたが、そこは口のうまい本図氏、『沢の上部のほうは今日は入っていませんヨ』と言フフォローをする。安心したようで彼らは夢中で消えていった。

我々も早速2人組の下ってきた赤布バンパンの沢を下山路にして進む。歩くこと3時間半で林道に抜けた。でも車までは、まだ1時間強は林道を歩かねばならない。

（後で聞いた話しであるが、近頃は室谷部落から入渓ではなく、ダム先の先よりの道が使われているとの事です。）私は両足に水腫れが出来てしまい、ピッコを引いて歩いていた。車が通過して行くのを見て、手を振ったら1台の車が止まってくれて室谷の部落まで乗せてもらった。私だけ先に車に戻ったのでみんなを迎えに行く。

本図氏には『ピッコ引いて歩いているので可哀想に思い拾ってくれたんだっぺよ』と言われる。その後、御神楽温泉で汗を流しビールを飲む、本図氏はドライバーの為ビールは断ったが、帰途の道程では、睡魔が彼を襲い残り4人の命も紙一重であった。

（菊地 記）



一の倉沢・烏帽子奥壁変形チムニールート

1995. 7. 15

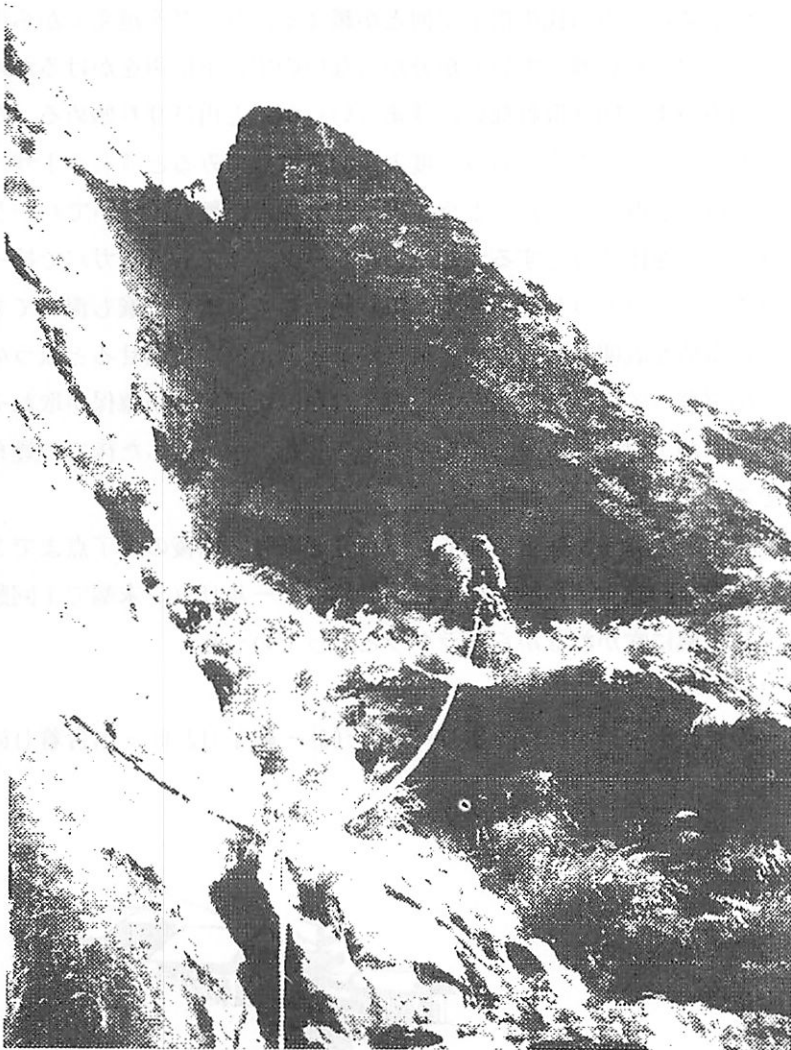
パーティ L古山正文、坂本昭裕、告広道

下館に21:00に集合し、谷川岳を目指す。谷川岳での岩登りは今回が初めてなのでワクワクする。一の倉沢出合に0時過ぎに到着。結構人がある。すぐにテントを張り酒を飲んで寝る。

早朝、出合出発。雪渓を歩きテールリッジに取り付く。烏帽子沢奥壁に到着し、取り付きを捜すが意見がなかなか合わず、アーダコーだしていたが結局、シュリングの掛かっている所から取り付くことにした。

2ピッチ目を登っていると、隣の中央カンテのいるパーティから『まむしがいる！早くピッチを切ってくれ〜！』との声がある。こんなところにも蛇がいるかと思うと気が滅入る。

5ピッチ目が、核心のチムニーだ。古山氏はトップで難なく登り切ってしまった。続くセ



変形チムニーにて・・坂本

カンドの坂本氏も順調に登っていたのだが、途中ランニングピレーをザイルから外し忘れて、一度降りて登り直したので、だいぶ気力が失せてしまった様だった。チムニーを抜けてから中央カンテヘトラバースするのだが出来そうな所がなかなか見つからず、後続に追い抜かれる。結局そこから5m登りトラバースする。

中央カンテに入りトップ交代してもらおう。トップを引くのも今回が初めてなので、張り切っていくが先行パーティがいるので自分の力で登っている気がしない。浮き石が多いのでザイルで石を引っかけないように注意する。

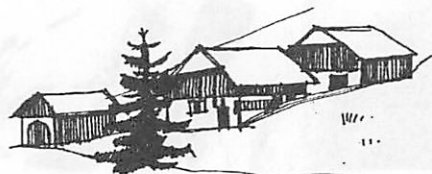
10ピッチ目、ハングを左に巻くところだが、古山氏が前回来たときよりも、ハングが崩れてきているなどと、気味の悪いことを言うので急いで登ろうとするが、なかなか手強い。古山氏の指示で何とか越える。ハングを越えてから凹角内に行くがザイルがどのくらい残っているか分からないので、下に声をかけるがハングの下にいるせいか声がよく聞き取れない。『まっいっか』と再び登り始める。がザイルがすぐに伸びなくなってしまう。もう一度よく聞き直してみると『もう！ザイルいっぱい』といやな返事が返ってきた。どうしよう？確保点が無い。急いでハーケンを出しピレー点（支点）を作ろうとするが、どのクラック？リスもガバガバで持ってきたハーケンは打てない。『どうしよう?!』気が動転してしまう。喉も渴いてきた。取り敢えず、下に事情を説明する。すると何とかあと3m位なら出せると云うので神にもすがる思い出で登ってみると、下からは見えなかったが何とか確保が取れそうな場所があるではないか！思わずホッと胸をなで下ろした。ホッとした後での煙草はやたらうまい。そこから2ピッチで終了。

懸垂岩のコルで昼食にする。草付きを降り、南稜の終了点まで2回懸垂、6ルンゼ右俣を2回懸垂、南稜に出て3回懸垂、テールリッジ末端で1回懸垂、あとは雪渓を涼しい風に吹かれながらダラダラと下っていった。

コースタイム

一の倉沢出会い(4:50)－取り付き(6:00)－終了(12:0)－出合着(16:50)

(告 記)



越後・五頭連峰・三階滝沢

1995. 7. 23

パーティ L 本図一統、坂本昭裕

『五頭（ごず）連峰？』聞いたことがない名であった。本図さんにもらった山行記録を見ると、「低くても越後の山」と書いてあった。どうやら新潟らしい。それでもピンと来ないので本図さんに訪ねた結果、新潟県新発田市とわかった。新潟県新発田市と言うと、当会のプリンス、チーフリーダー古山氏を生んだ町である。これはぜひ古山さんも行くしかないなあと思った。そして故郷に錦を飾るがごとく凱旋し、新発田の古山ここにあり……。なあ～んて、しかし、何やら故郷には帰れない訳があるやら、無いやら、今回は他の山行に出かけるとの事。という事で本図、坂本の2人での山行となった。

東北道から磐越道をひたすら走り、三階滝沢の入渓口である中ノ沢公園に到着したのは1時過ぎであったと記憶している。その夜はビールを飲んですぐに就寝。翌朝は5:00に起床である。少し心配していた天候もどうやら大丈夫らしい。

朝は、近くの宿泊施設で合宿している高校生と思われる少年、少女の声で目が覚めた。ちょっと曇ってはいるがまあ行けないことはないだろうと思った。

ルート図によると1泊2日コースであるが、早立して日帰りする予定である。五頭連峰の沢は『高巻きの五頭』と呼ばれているらしく、確かにこの三階滝沢も高巻きが多いみたいである。

沢の様子は上流で雨が降ったらしく、水量も多めで、若干濁っていた。まあ行ける所まで行ってみようという感じで出発した。沢の水は思ったより冷たくなかった。新品のシューズのフリクションも素晴らしい。

沢に入るなり堰堤があり、左岸を巻く。次に1m、5mの滝も左岸を高巻き、6m2条の滝、どうやらこれが三階滝らしいがこれも右岸を高巻き、次の逆S字も高巻き、う～んさすがに『高巻きの五頭』である。本図さんも僕も少々閉口気味であった。1時間位してようやく沢の中を遡行し始めた。結構ゴルジュも出てくる。これで水量が少なく、水もきれいだったらもっと楽しめただろうと思った。

又、この山は高度は余りないが、豪雪地帯と云うこともあり、雪渓があるとのこと。雪渓があればそこも高巻きとなる。幸いわずかに雪渓の塊があるだけで、高巻きは免れた。



五頭山・三階滝沢『ヒャー！冷てゑ〜』と坂本

雪渓を過ぎると20mの大滝に出くわした。水量があり当然直登は無理。ザイルを出して右岸のリッジを登る事になる。大滝を越えてようやく二俣に着いた。記録によるとここでビバークしたと記録にあるが、個人的には余り良い場所ではないような気がした。この先は段々傾斜も強くなり川幅も狭くなっていくような気がした。

上の二俣では、左俣になかなか素晴らしい30メートル程度の大滝があった。我々は右俣をいく予定である。この二俣で昼食とする。時間は11:00頃であった。朝は曇りであったのに、青空が広がっていた。休息をとるまで気がつかなかった。おそらく梅雨明けだろう。下界の暑さが想像できた。

昼食後一気に沢をつめた。傾斜もかなり強く、僕はかなりバテていた。相変わらず本図さんは平気そうである。おかしい。やはり年令を誤魔化しているのではと思った。途中スパイクアイゼンを試した。僕は古山さんの物をお借りしていたので試してみた。急登には非常に具合は良かったが、バンドの調子が今一つという感じであった。登山道に出たのが12:30頃であった。荷物をおいたまま頂上へ向かったが何もない山頂で、ちょっとがっかりであった。駐車場までは2時間ぐらい歩いたのだろうか。意外にアップダウンがあった。やはり下界は暑く梅雨明けという感じであった。又、夏休みと言うこともあって駐車場は、子供連れが多かった。帰路の途中、風呂に入ったが名前を忘れてしまった。何だったかなあ。何か大きなプールもあったなあ。

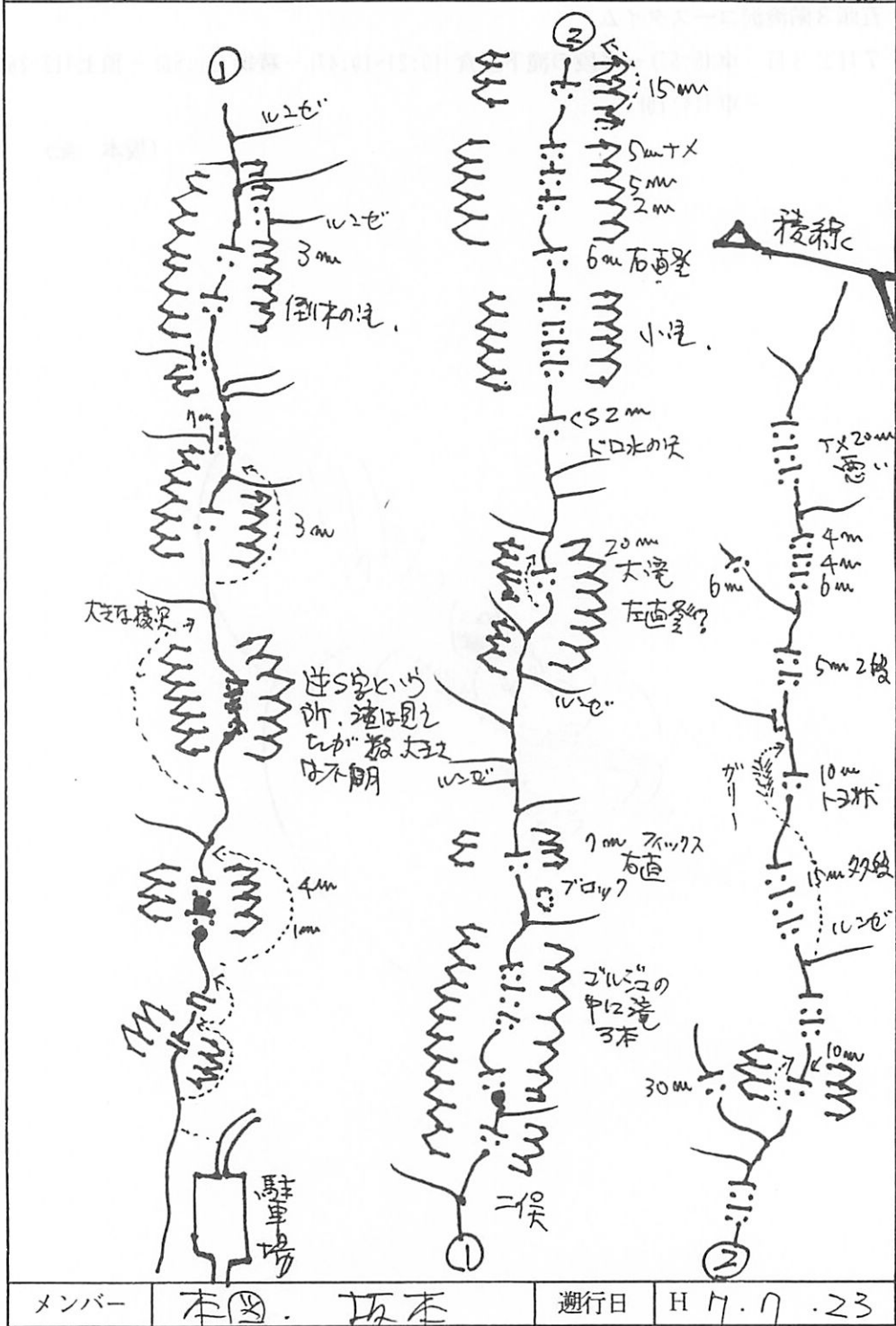
五頭連峰には、他にも沢があるらしいが次は古山さんもおすすめしたい。

五頭3階滝沢コースタイム

7月23日 車(5:57) - 多段の滝下昼食(10:21~10:47) - 稜線(11:56) - 頂上(12:26)
- 車(14:10)

(坂本 記)





前穂高岳・北尾根4峰正面壁・北条・新村ルート

1995. 7. 24~25

パーティ L古山正文、中居康展

七夕クライマー（最近では下部しか登らない“下部野郎”という称号が追加されたらしい）の私に山に行ける数少ない機会、そう夏休みがやってきた。今年は昨年のように2回に分散というわけにはいかず、一週間まとめて休みをもらう事となった。さて相棒は、勿論こんな馬鹿な日程に付き合ってもらえるのは当会のチーフリーダー古山教授しかいない。という事で古山さんに電話すると、何やら本図さんが今年も病気の沢の計画を持っていて、嬉しいことに日程を合わせてもらえるようなのである。

まず後半戦の不動川に参加することに決定し、さて休みの前半戦を何処にするか、せっかくだから乾いた岩でも登りに行くか、という事で長電話の末に北条・新村ルートに行くことに決定した。（実はぎりぎりまで松高ルートにするか、北条・新村ルートにするか迷った。更にアルパインクライマーならば頂上を目指す一つの手段として岩壁登攀を位置づけよう、という主旨のもとビパーク装備一式を背負って登攀を行なうことに決定した。）

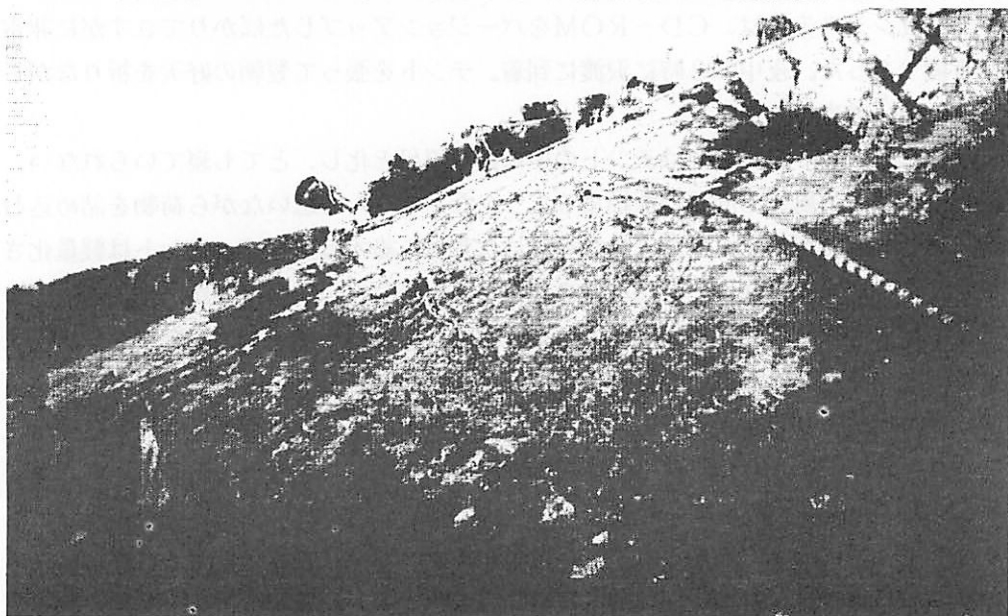
幸いにして23日の日曜日夜行出発が可能となったので、21日下館集合、市民病院に車をおいて我が愛車パジェロ（2年前の夏休みはジムニーであった事を考えれば自由を失った今出来る数少ない贅沢である）は一路、沢渡へと向かった。今回のナビゲーションシステムは、CD-ROMをバージョンアップしたばかりでさすがに非常に有能であった。夜中の2時に沢渡に到着。テントを張って翌朝の好天を祈りながら酒をくらって寝る。

猛烈な日差しで7時前にはテントの中は蒸し風呂と化し、とても寝ていられない。たしか去年の屏風岩も同じ様な始まりだったなあ～なんて思いながら荷物を詰め込む。全装を詰め込んだザックはなまめた身体には想像を絶する重さで、テントは軽量化されツエルトに変更となる。こんなのを背負って岩登りなんか出来るかよ～と思いつつ、上高地行きのバスに乗り込んだ。上高地は相変わらずの観光地で朝飯など簡単に済ませて出発する。ここに来ると毎年のように次は女の子と来るぞなんて思うのだが、その夢は6年前の夏の北鎌尾根を男3人で登って以来果たされる気配はない。（多分次に来るときも夢は果たされないままだろう）徳沢を過ぎ、新村橋を渡ると急に人気が無くなり、奥又白沢の脇に付けられた登山道ではおもいきり太陽に炙られる。松高ルンゼで尾根に取り付くところを少し迷ったが、後は特に問題なし。最近ばかり踏まれている道を背中のビールに励まされつつ2時間ばかり登ると雪渓が現れ、前穂東壁が正面に望まれた。すぐ脇がかのクライマーの楽園奥又白の池で、雪渓で少々休ん

だ後、僅かな登りで本日の目的地に到着した。丁度下って行く2人組がおり、今日は素晴らしい天気だったとの事。

池の水は汚いが、眼下には蝶々常念の山並みから横尾まで望め、更に大きな壁となって立ちふさがる前穂東壁が一望できる素晴らしい場所である。蠅がうるさいが、すぐそばには水場もあり、本当にしばらくベースを張って登りたくなるような気持ちになった。一張りテントがあり誰かベースを張って登っているのかな？なんて思いながら、ツエルトを張った後、雪渓まで軽く偵察に出かけた。（どうもこのテントは遭難者の搜索ベース用に張ってあるようで、この日は誰も帰ってこないまま張りっぱなしになっていた。）モレーンを越えると少しガレを下って雪渓に出る。取り付きまで全部見えるわけではないが、取り敢えず切れた雪渓はなさそうで一安心。日の当たっているうちに雪渓で冷やしたビールで乾杯していると、涸沢方面と間違っただけで登ってきた登山客1名。さすがに今日はここで幕を張るとのこと。今回もまた例によって急速にアルコールが回り、早くも酩酊状態。古山さんのせっかくの鰻丼もほとんど食べられずに早くも御休み体制になってしまった。（結局夜中の11時頃に腹が減って全部食べたけど、このネタで当分古山さんにいじめられそうである。）

3時半起床。4時45分まだ薄明るいうちから出発する。4峰正面はガスに覆われている。黙々と雪渓をつめる。甲南バンドへの取り付きは明瞭で、容易な岩稜をどんどん登り、どんずまりの顕著なテラスでアンザイレンする。余りガリーの形をしていないがここが取り付きだろうと古山さんトップで登るが、残置は乏しくやけに難しい。2ピッチ目も残置ハーケンはあるのだが、とても登られている雰囲気ではない。しか



核心のハングを越え、ピレー体制の古山

も岩は逆層で、下から見上げるよりもずっと難しく、4級以上はある。2ピッチ登ったところから、ハング状となりどう見てもルートが違うという事で懸垂した。この後はザイルが引っかかって回収するのに登り返したりで、結局本当の北条・新村ルートを登るまでに3時間のロスとなった。（後でルートを見直してみると、どうもT2迄甲南バンドを登り過ぎてしまい、月稜会ルートに入っていたようだ。）北条・新村ルートはクラシックルートにしては残置が少ないが、我ら3級友の会同人にとってはなかなか快適で、ザックを下ろし一休みした後、核心の4級A1のピッチに挑む。古山さんトップで小ハングを一つ乗っ越したが、ザックの余りの重さとアブミが回収できなくなった為、ハング上でいったんピッチを切り続いて登る。アブミを回収しテンション混じりでハング上に這い上がるが腕力なしで、さすがにこの先はこの荷物で突破できる自身が無く、空身で古山さんが抜けザックを釣り上げるという方法でやっと思いでこのピッチをクリアした。高度感もあり荷物さえなければ最高のピッチだろう。ここで残念な事に古山さんのカメラが落っこちてしまった。

次は逆層のトラバースとカンテ状を登る4級だが、露出感もすごくが逆層がひどく感じる。先のピッチで腕力を使い果たしてしまった為、情けないが一部A0で抜ける。冬か春のパーティだろうか？アブミが2台も残置してあり夏のシーズンに入ってどうやら最初のパーティになったようだ。この後も余りルートが判然とせず、フェースからカンテ状一部木登りも交えて少々はい松をこぎ13時登攀終了。荷上げなどで予想外に時間を取られた。行動食を詰め込んで、稜線まで緩傾斜帯を登るが浮き石が多く気を使う。おそらく今日登っているのは我々だけなのだろうが落とさないことに越したことはない。3・4の科尔ではビナとハーケンが残置してあった。全く今回はいろいろなものが落ちている。“某M氏がいれば大喜びするだろう”と日記には書いておこう。3峰の登りでチムニー状にザイルを出す。ルート図ではザイルを出すのはここだけのようなのだが、3峰まで直上するようにルートを取ると（現にハーケン、ボルトも残置してある）結構悪く、更に2ピッチザイルを伸ばした。（後でよく見直すと涸沢側より岩峰を巻いていけばザイルはいらなかったようだ）3峰、2峰は涸沢側を巻きようやく15時過ぎに前穂高岳の頂上に着く。誰もいない広い山頂、黙々とガチャ具をまとめ下山の準備をする。日差しが直接照りつけなかった分水分の消費が少なくすんだ。上高地発の最終バスは18時、空身でもなければ間に合わない。せめて最終のタクシーの間に合わせるにも20時前には下りなくてはならない。何としても今日中には下山せねば、と疲れた身体にネジを巻き直した。

重太郎新道は、結構急な下りでしかもガレ場、鎖場が多く気を使う。1時間半ばかりで岳沢ヒュッテに到着、思ったより順調である。しかもここから上高地までは果てしなく長い、ばてた身体はただ惰性で動くのみであった。上高地に続く林道に出た所でやっと喉を潤すことができた。明るいうちに着けば河童橋で記念写真のつもりだっ

たが、もう真暗でついでにその気力もない。19時半上高地着。タクシーは最後の一台で20時丁度だとトンネルの信号の関係で乗れなかったとのこと。全くぎりぎりのセーフというところである。

一服すると疲れがどっと出て逆に帰れなくなるから、と云う古山さんの意見で服を着替えただけでそのまま晩飯も喰わず夜中の上信越道から50号を經由して下館まで帰った。短くて中身の思いっきり濃い前半戦はこれで終了。このまま2日おいて後半戦に突入である。(私の夏休みはこのまま不動川下部廊下に行く)

コースタイム

7月24日 上高地(8:40)－徳沢園(10:10)－奥又白の池(15:00)

7月25日 奥又白の池(4:50)－T2《月絵ルート》(6:00)－T1《北条新ルート》(8:50)－
終了(13:00)－《前北尾根》－前穂高岳山頂(15:10~40)－上高地(19:30)

(中居 記)



終了点にて…中居

海谷山塊不動川遡行

1995. 7. 28～29 (下部遡行)

パーティ L本図一統、古山正文、中居康展

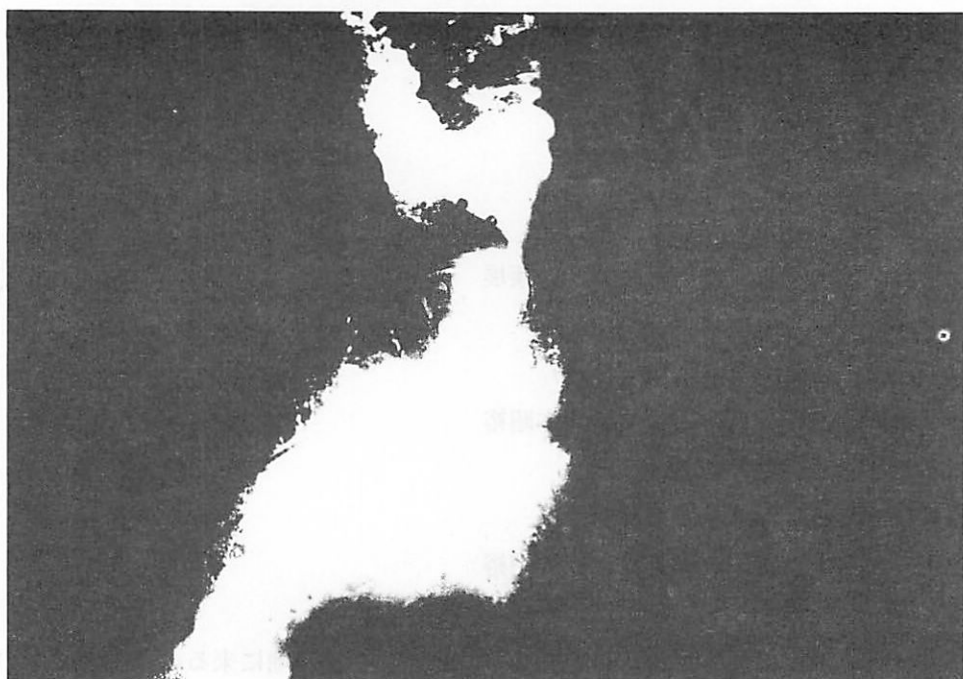
1995. 9. 15～16 (雨天中退)

パーティ L本図一統、古山正文、坂本昭裕

1995. 9. 23～24 (上部遡行)

パーティ L本図一統、古山正文、坂本昭裕

7月28日。晴。早朝、粟倉入口のバス停に着いた。この地に来るのは初めてなので、地理にはまったく不案内で、明るくなってから入渓地点を探すこととして、このバス停で寝ることにする。農村の朝は早い。明るくなると同時に人々は動き出す。我々も食欲はないが、無理におにぎりを胃袋に押し込んで行動を開始する。最初に会ったおじさんに不動川の入口を聞くと、林道を終点まで行って、そこから山道を行けば良いと教えてくれた。いままでの文献には書いてなかったルートだ。林道終点の広場で準備をしていると別のおじさんが上ってきた。話してみると、当番で不動川の取水口に見張りに行くとのこと。弁当を持っているところを見ると、今日一日中居るらしい。そのおじさんの後を追って不動川に向かう。トウスル沢を渡り不動川には20分あまりで着いた。計画書を提出しそこねてしまったので、おじさんに何かあった時は宜しくと挨拶を交わし遡行を開始する。まもなくゴルジュ入口に着く。不動の滝が、すごい迫力で落ちている。なるほど、これを直登するのは大変だ。登攀準備をして迷わず右岸の高巻に入る。この高巻は、はっきり言って悪い。しかし今回は秘密兵器を持ってきた。とまのかぜの手嶋氏に教わったスパイクアイゼンである。このおかげで3級の高巻に変わってしまった。途中10mの懸垂をしたが、あとは問題なく2の沢に着いた。この下の30m滝は立派だ。今日のピバーク地は此处とし、ルート工作にでかける。すぐに4m滝になるが、トップはショルダーで登り、後続はユマーリングする。大岩で出来た滝を2つショルダーで越すと、大きな釜を持つ4m2条にでる。右岸にはシュリング付きの残置ボルトが、此处から登りなさいとばかり見えているが、そんな所から取付いたら時間が相当かかるに違いない。中居が果敢に泳ぎ、滝左のリスにバイルのピックを引っかけてバンドに這い上がる。さて次が本日の核心10mCSだ。

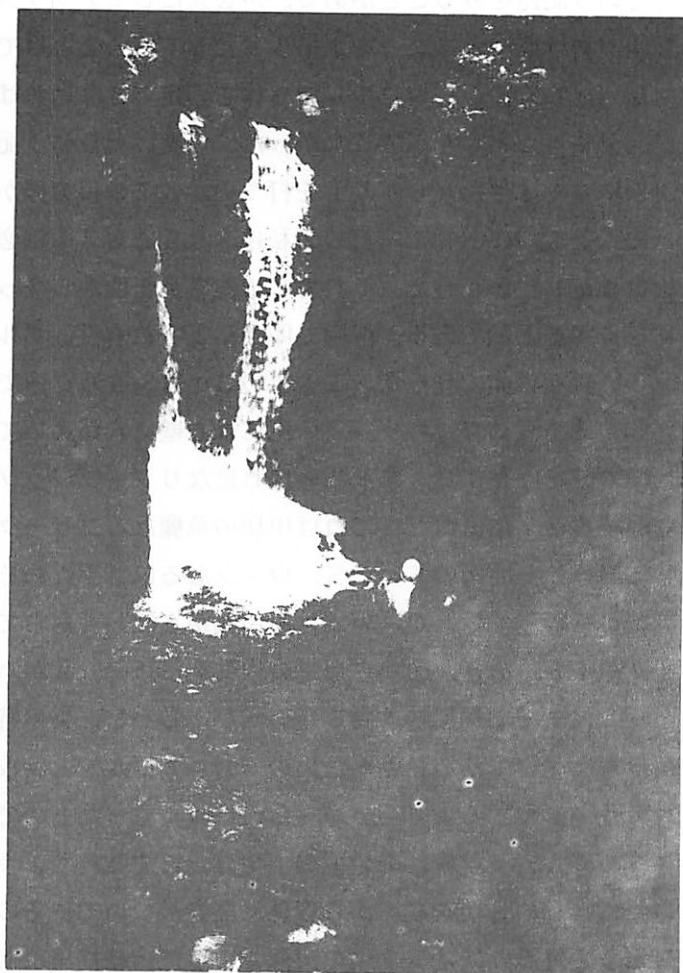


ダイナミックな下部遡行・by 不動川

ルートは左岸の被った所を人工で登るのだが、ボルトも数本抜けており、残置も頼りになる代物ではない。ここは古山のリードで取付く。フレンズで一段登り、ボルトを打つ。なんとすぐに穴があいてしまう。すぐに穴があくのは嬉しいが、それだけ効いていないということで、恐ろしくもある。ここに4本のボルトを使用した。ヒョウタン渚の先、洞穴状渚を水流に向かって中居が泳ぐ。滝の下でピッチを切って本図と古山が行く。本図が瀑水に突っ込みこれを直登しようとする。瀑水で息ができない。でも根性でこれを登り切る。1mを正面左のクラックから登ると、丸い釜の奥に登れない1m滝がある。左のリッジを登り4mの懸垂。すぐ上の釜を泳いで4m滝の左を直登する。落口に踏み出す一步が恐かった。小滝を過ぎるとトヨ状1mが急流となって落ちている。水勢が強くとっても滝には近づけない。古山がアタックするが、もう一步という所で選手交代となる。今度は本図が行く。左手のリスにハーケンを打つことに成功し、アブミを使ってこれをクリアーする。小滝を2つ登ると、薄暗い洞穴状の、どでかい釜の奥に3段の滝があった。瀑水の右側には人間がくぐれる大きさの岩穴がある。先ほどの直登に気を良くした私は、この滝もリードしたいと志願する。20m泳ぎ、滝に近づこうとするもなかなか手ごわい。右岸の岩を蹴り、その反動でさらし場を横切り左岸の岩をつかむ。この上に這い上がったところで本日は時間切れのため下降する。10mCSと4m2条と最初の4mにザイルをフィックスする。2の沢出合のビバーク地は、滝の風がそよそよと吹いているため虫はいない。下部ゴルジュの中では最適のビバーク地であるが、3人まとまって横にはなれない。イワナはないが、

焚火をしながらの一杯は最高であった。釣りをしている時間もなかったが、恐らくこの谷にイワナはいないと思う。満点の星空の元、静かに夜は更けていった。

7月29日。晴。今日中にアブキの河原まで行きたいので早立ちする。4mと10mCSはユマーリングで登るも、10mCSのザイル固定位置が悪く以外と時間をくってしまう。昨日の最高到達点である3段の滝は古山がリードする。3段目は登れないので左岸をトラバースする。ここに残置ボルトがあり、左岸上に脱出できそうで、非常の場合の避難に使えるか



4mCS 2条の滝(上部)

もしれない。3mと1mを越すと左岸のテラスに残置ボルトがあった。ここの地形を説明すると、雪溪上のスプーンカットを、もっと深く掘ったようなテラスとでも言っておこうか。ここからも左岸に脱出できそう。しかし、すぐ先に見える滝はどう登ればよいのか。文献にあった直登するにはボルト20本必要とあるのはこの滝のことか。だからといって巻くことを考えたら、絶対直登の方が速いし安全である。ここは古山の出番であろう。20m泳ぐも水勢強く滝に近づけない。ヤツメウナギ泳法を駆使して滝下まで行くも、すぐに押し戻されてしまう。こんなことを30分もやっていたらどうか。やっとクリフハンガーを引っかけることに成功した。これを見ていた私は、これでこの滝はいただきだな、と確信した。早速ジャンピング作業にとりかかる。しかし、体が安定せずなかなか穴があかない。(たまに文献で、泳ぎながらボルトを打っ

たという記述をみることがある。声を大にしてデタラメユウナと言いたい。確かに少し穴があけば、ホルダーをホールドにして打つことはできる。しかし、最初からは打てないだろう。どこかに少しでも体を固定できなければ打てないと思うし、私自身も何回もやろうとしたができなかった。一度、そういう記録を発表している奴が、どのようにして泳ぎながらボルトを打つのか、この目で確かめたいもんだ。) 古山は、やっとのことでボルトを1本打つ。私は少なくとも3本は必要と睨んでいた。ところが古山は乗越しにかかった。それでこの滝を真正面から登ってしまった。苦労したのは後に続く中居と私である。何回も叩き落とされ水没。ボルトにしがみつく。これを繰り返して、這々の体で登った。この上の3mはショルダーで登り、浅い流れを行くと大きな釜の5m滝にでくわす。この滝には右壁に穴があいており、泳いでからこの穴を潜り、右壁を直登する。また浅い流れになりジャブジャブと気持ち良く歩いて行く。右に曲がると7m直瀑だ。これは中居の華麗なるフリークライミングでクリアー。さてさて出ました問題の5mCS。ウ〜ンなるほど手ごわそうだ。以前の写真では水は左岸側から落ちていたが、いまは右岸側から激しく落ちている。またまた古山の出番で〜す。15m泳ぎ、頭から瀑水の中に突っ込む。我がパーティを私はゴルジュ特攻隊と呼ぶ。まるで神風特攻隊みたいだが、しかし、神風特攻隊と根本的に違うのは、神風はもう生きて帰ることがないのに対し、ゴルジュ特攻隊は必ず生きて帰らなければならない。案ずるより産むが易しとは良く言ったもので、古山は以外にも簡単にこれを登ってしまう。落口の岩棚の上で昼食にする。ちょうど3の沢の出合であった。この先は大釜の8mを左岸から容易に高巻、ついでにその上の3つの滝も一緒に巻いてしまう。降りた所はアブキの河原であった。結構早く着いた。蟬時雨が心地よい。岩小屋の下に石仏がひっそりと立っている。ゆっくり休んで下降に入る。アブキの河原からコルまでは5分かからない。道がはっきり付いていて安心した。壊れた梯子やフィックスなどもある。その道は壁の中を縫うように付けてあり、昔の人のルートファインディングに感心させられた。しかし、万年草の斜面に出た所で道はなくなってしまった。あとはやぶごぎしながら下っていくと、水路沿いの道にでたので、それを粟倉に向かう。あまりの暑さに3人共かなり疲れた。古山と中居が車を回収に行った後、一人で道路に寝転んでいたら、昨日不動川に行く道を教えてくれたおじさんと会った。おじさんにアブキの河原に行く道のことを聞いたら、あの道は春の雪があるとき使っているの下の方に道はないと言っていた。今日は明星山南壁の前の駐車場まで移動し、大宴会となった。この時期に、駐車場には一台の車もなく、さすがこの暑いなか南壁に登っている人もいなかった。

9月15日。雨のち晴。栗倉に着いた時には既に雨。どうせ今日はだめだろうと一杯やる。天気予報でも、今度の台風12号は戦後最大級で、海山共に大荒れと報じている。明るくなっても相変わらず雨が降り続けている。よりにもよって、この不動川では入谷はできまい。帰ろうとの話も出るが、私は、せっかく茨城から来たんだから、アプローチだけでもしっかり確認しておこうと主張した。雨が上がったので出発する。予想どおりコルへの入り口がわからず難渋した。けっこう悪い木登りをしてコルに出た。天気も良くなってきたので アブキの河原にベースを設け、ルート工作にでかける。しばらくは河原が続く。4の沢を左岸から入れ、5の沢を右岸から60mのスラブ滝で入れる。ヤシオ沢が30mの直瀑で流入すると傾斜が増してくる。1m滝を泳いで過ぎると4段の滝にでる。運よくと言ったら良いのか、大きな倒木が横たわっている。坂本はダッコチャン（年がバレるかな）登法で難無く行くが、古山と私はアイスハンマーで渡るもツルリといきそうだった。小滝を2回泳いで越すと、CS4m2条に行く手を阻まれた。先駆者は右手の岩をボルト連打で越しているようだが、残置はない。古山が20m泳ぎ、瀑水に突っ込む。滝の裏にボルトを1本埋めアブミで登る。旗振沢（6の沢）が左岸から本流と同じ位の水量の連瀑で入る。旗振沢は連瀑のとても綺麗な沢である。そして、この付近の本流の岩の色は赤で、いわゆる赤いゴルジュを形成している。何という



4段の滝（大きな流木が登路となった）

名の岩なんだろうか。初めて見る光景に一瞬見とれた。5mを左壁直登すると15m滝だった。あまりにもここまで順調に来たので、もっと上まで行きたいという者もいたが、明日の天気のこともありペースに引き返す。夜は焚火を囲んでの楽しいビバークになった。

9月16日。雨。明け方から雨になり少し増水してきた。アプキの河原の石仏前は不動川では最高のビバーク地で、少しの雨ではハングした岩の下なので濡れないし、少しの増水では心配ない。雨は止みそうにもなく下山する。次回のために、コルと水路の間には赤布をたくさん付ける。

帰りの車中で、古山と坂本はなんとしても今年中に不動川を片付けないと夜も眠れないという。私は来年でもいいんじゃないと言ったものの、気持ちは同じ。結局来週アタックに決まった。

9月23日。曇一時小雨。先週に引き続き、今週も台風14号が新潟に接近中であるという。決心が着かず、50号を赤堀村まで行くが、やはり今回はやめようと佐野市まで戻る。ところが車載のテレビでの天気予報では、予想進路が今までよりいくらか北によっているではないか。この進路なら、風は強くても雨はあまり降らないのではないかと予想できる。これで、よし行こうと決心がついた。再びUターン、糸魚川に向かった。今回は入山地を栗倉から海谷第2発電所に変える。このアプローチは前回偵察



上部・15m滝を左直登す。

済みである。2時間の仮眠の後出発。少々のヤブコギで水路に出、今度は迷わずコルに出られた。アプキの河原まで1時間強であった。このアプローチを初めての人が捜し出すのは至難の業であろう。前回の到達点までは勝手知ったる何とかで極めて順調に進む。15m直瀑は左壁をノーザイルで直登。滝を4つ越すと、右岸から小沢が入る。非常の時、避難できそうな沢である。巨岩帯を過ぎると記録で見た大岩のトンネルだった。トンネル内には3m滝があり、先駆者は右岸を巻いているようだ。これを坂本は直登してしまう。トップが登ってしまっは私と古山も登らない訳にもいくまい。シブシブ取付くが、2人共お助け紐によって登ったのは言うまでもない。続いて15mCS滝だ。ここが上部ゴルジュ帯の正念場であろう。直登は望めない。右岸には古いボルトラダーがある。一時はこのボルトラダーを行こうと準備するが、このボルトラダーは直登ではなく、上のブッシュに向かって続いている。しかもそこには先程の大岩からブッシュ伝いに行けるのである。なんか急にボルトラダーを登る気無くし大岩に戻る。大岩から見ると、左岸の草付きの方がもっと容易そう。左岸の草付きを登り、25mと15mの2回の懸垂で沢に降り立つ。この懸垂支点到ボルトを2本使用した。左岸から7の沢が80mのスラブ滝で入ってくる。すぐに2mCS滝だ。これが最後の悪場と思われる。先駆者達はナメナメルンゼから右岸を巻いている。坂本が直登すると果敢にアタック、釜を泳ぎ、瀑水に逆らいながらバックアンドフットで登る。後に続く2人は又シブシブ行くも、ザイルに引かれながらラクチンラクチンで終了できた。坂本のクライミングは往年の生井を彷彿とさせる登りで、これは素質からくるものであろう。後は問題となる滝はなく、8の沢と9の沢を過ぎ、2俣に着いた。文献によると、水量比は1対1もしくは2対1で、左俣の方が多いはずなのに左俣には全然水がない。地図、磁石、高度計でみても2俣に間違いないはずだ。半信半疑で左に入ってみると、やがて水が出てきた。伏流になっていたのだ。10の沢、11の沢の奥はスラブになっている。本流最大の50mスラブ滝は結構迫力がある。直登できそうだが時間も時間なので迷わず巻きに決定。今までの記録では2段となっているが、どう見ても3段に思えた。左岸ルンゼから以外に簡単に巻けた。これから先の2俣はすべて左に進路をとる。この辺に古い赤布がいくつかあった。1畳位の所を整地しビバークにする。お世辞にも豪華とはいえないが、ビールと焼酎で乾杯し、今日の健闘をたたえあった。焚火を囲み、今宵も気持ち良く酔えた。良き沢、良き友にめぐり会えた幸せを感じつつ眠りについた。

9月24日。晴一時雨、強風。登りにくい滝もあるが、問題なる所はなく、地図と磁

石で確認しながら烏帽子山と阿弥陀山間の稜線に向かう。稜線に出た途端、強風に見舞われる。ブッシュは濃く、足が地につかないとはこのこと。さらに垂直の木登りが2カ所あり、ザイルをだそうかとも思ったが結局ださなかった。阿弥陀山の肩に出たところでブッシュが切れた。すると強風のため歩けない。岩角を掴んだまま動けないのである。手を離すと飛ばされてしまいそうだ。強風の合間を縫って這ってジワジワと進む。両側はスッパリと切れ落ちており、とても恐い思いをした。ちょうど台風14号が新潟沖を通過中なのであろう。頂上で記念撮影後、ブッシュ帯を阿弥陀のコル目指して降りていった。阿弥陀沢左俣は平凡な沢で、ザイルを使うこともなく簡単であった。ただ時々降ってくる雨には、増水だけはしないでくれと祈る気持ちであった。海川本流を徒渉し取水口で休憩する。風は相変わらず強く、ゴウゴウとうなりをあげている。海川第一発電所までは海川を2回渡るのであるが、7月の洪水で橋は流され徒渉をさせられた。風は強いものの雨があまり降らなかったことに感謝した。強風で目の前に枯枝が落ちて来たり落石があったが、無事海川第一発電所に着く。広場でザックをほおりだし、大の字に寝転ぶ。ちらちら青空も見えだし、風も弱くなってきたようだ。発電所で電話を借りようとしたら一般の電話はないという。さて困った、御前山まで歩きかなと覚悟したら、親切なおじさんが携帯電話でタクシーを呼んでくれた。しかもタダで。

P S. 帰り道、関越道を六日町まで来たところ、エンジンがオーバーヒート。J A Fのお世話になり、皆さんに迷惑をかけ、散々な目にあい、やっと茨城に帰ったことを付け加えておく。さらに修理代が47万円かかったこともね。皆さん仕業点検は怠らずにやりましょうね。

7月28日

車(8:06)ー出合(8:22)ーゴルジュ入り口(8:34~9:12)ー2の沢(10:28~11:15)
ー3段の滝まで(16:46)ー2の沢(18:01)

7月29日

2の沢(6:04)ー6mCS上昼食(12:23~12:48)ーアブキの河原(13:05~14:02)
ー栗倉(15:55)

9月15日

栗倉(9:55)ーアブキの河原(12:21~13:09)ーヤシヨ沢(13:35)ー旗振沢(15:13)
ー20m滝下(15:21)ーアブキの河原(17:10)

9月23日

海川第二発電所 (6:12) - アプキの河原 (7:27~7:52) - 20m滝下 (9:37)
- 2俣 (13:23~13:55) - ビバーク地 (16:00)

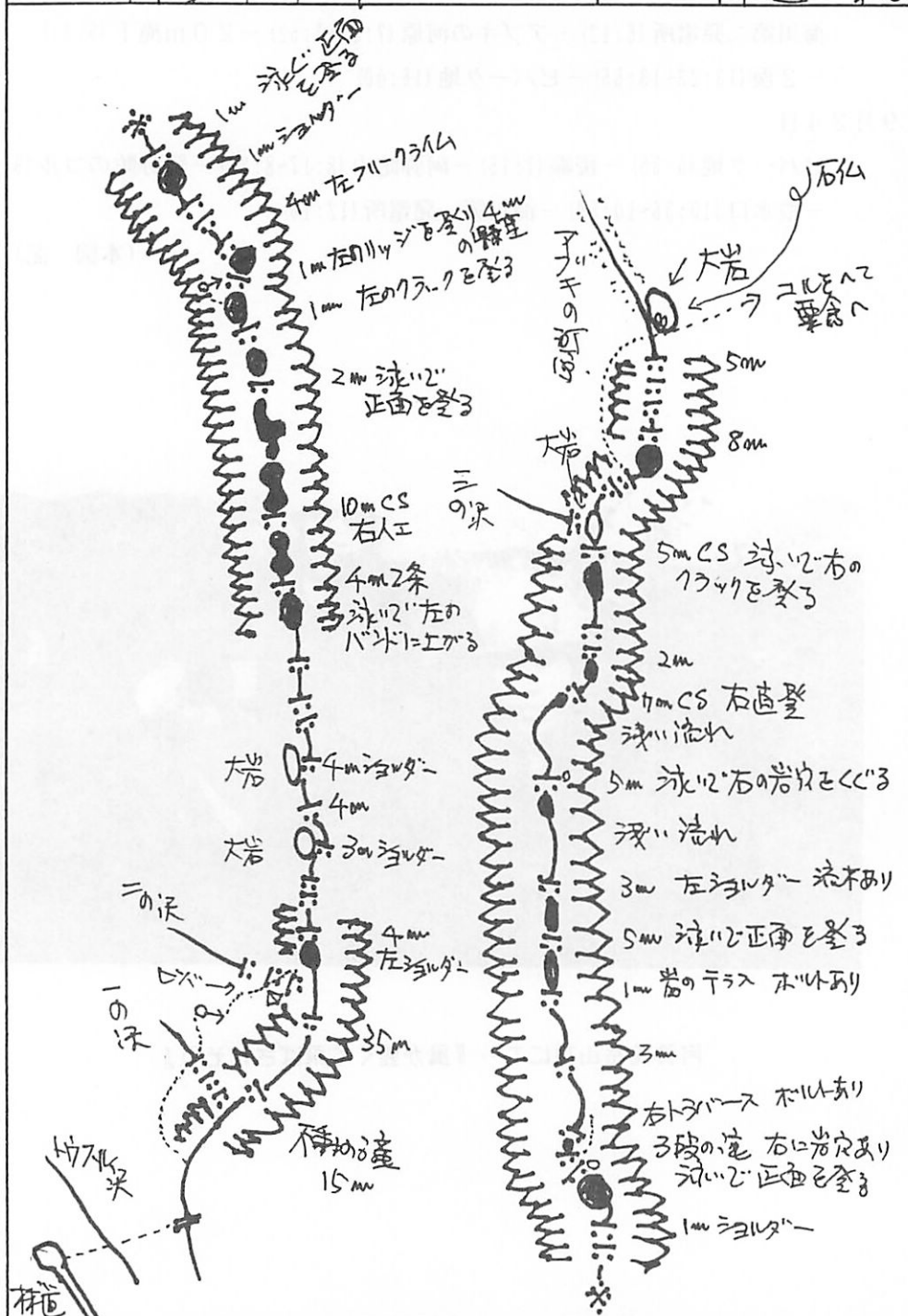
9月24日

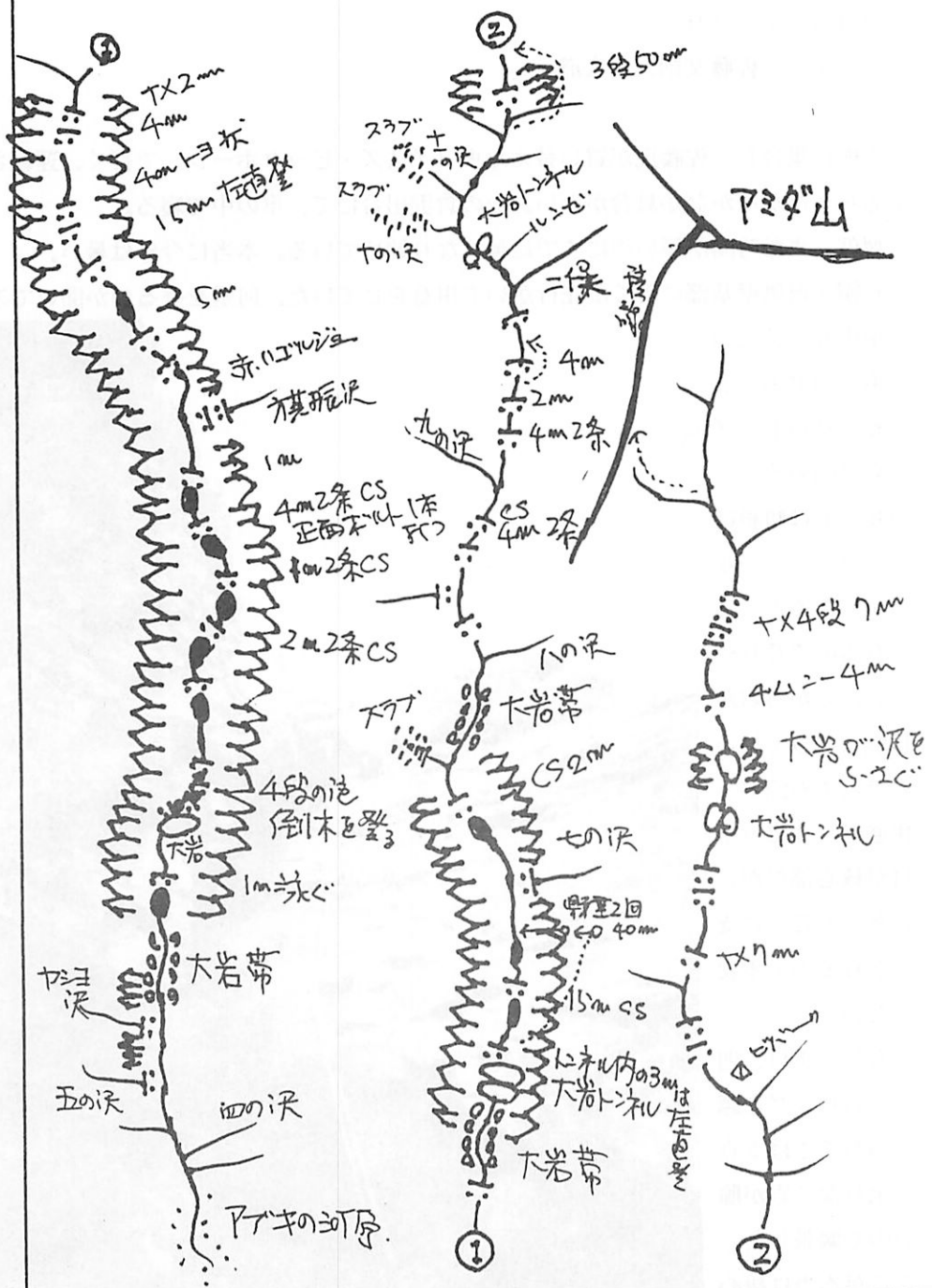
ビバーク地 (6:35) - 稜線 (7:15) - 阿弥陀山 (8:17~8:28) - 阿弥陀のコル (9:16)
- 取水口 (10:36~10:59) - 海川第一発電所 (12:16)

(本図 記)



阿弥陀岳山頂にて・・『風が強くて飛ばされそう』





谷川岳・一の倉沢・烏帽子沢奥壁凹状岩壁ルート

1995. 7. 30

パーティ L 佐藤文則、告広道

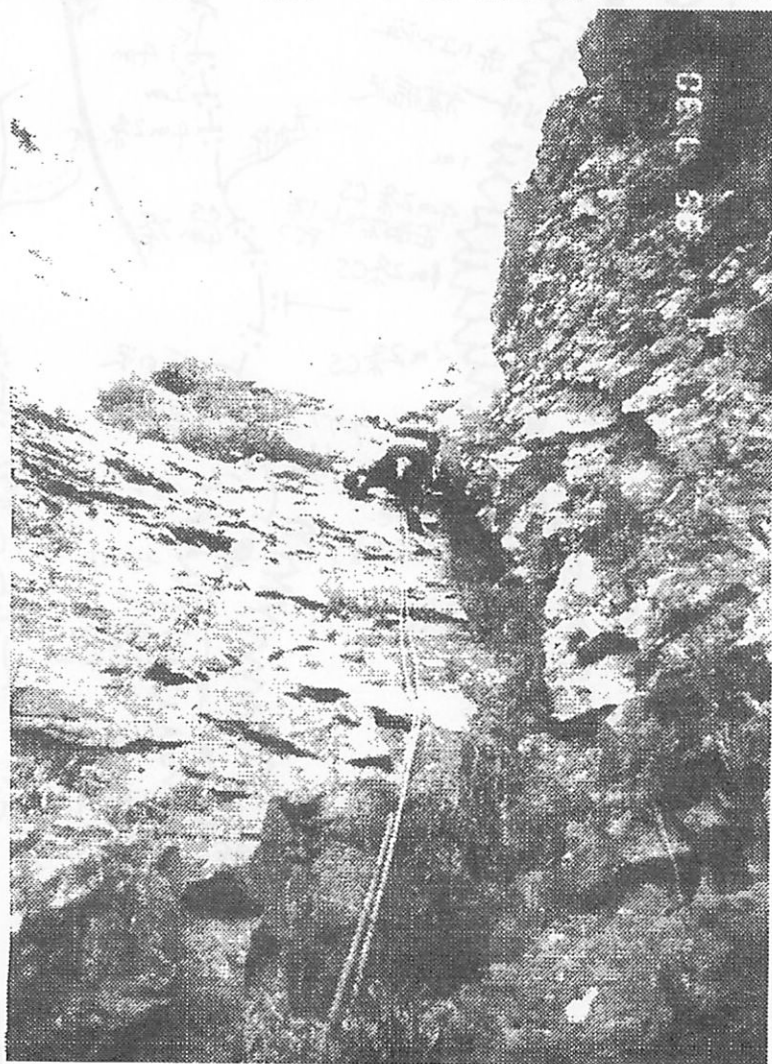
下館に集合し、佐藤氏が買い替えた車（イスズ・ピックアップ）で行く。運転させてもらったがなかなか具合がいい。一の倉沢出合にて、車の中で寝る。

翌朝、まだ時間が早いのにすでに暑くなり始めている。本当に今年は暑い。

烏帽子沢奥壁基部に着くが先行がいて用意をしていた。何処に登るのか聞いてみると中央カンテとい

う事なのでホッと
する。私がトップ
で登り始める。こ
のルートは傾斜は
きついが、ホール
ドがいたるところ
に有るので登りや
すい。しかも岩が
日陰になっている
のでとても涼しく
快適だ。4ピッチ
目が核心部だが、
いたるところに支
点が有るので不安
はない。

5ピッチ目、凹
角からハングを越
えるがここは支点
が余りなく岩が脆
いので緊張した。
ここが本当は核心
じゃないかと思っ



凹状岩壁・核心部を登る佐藤

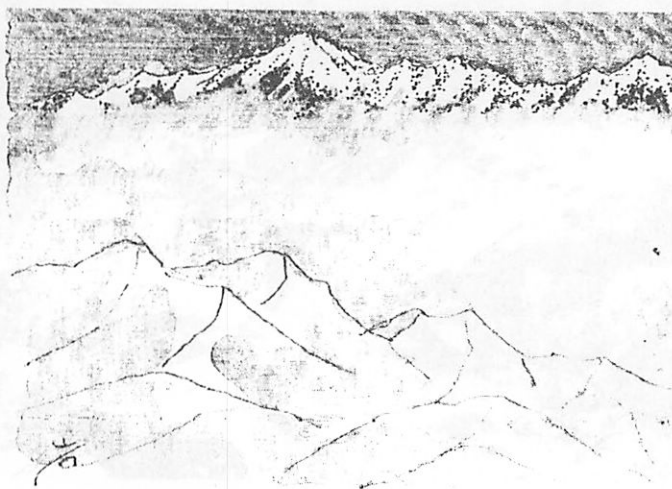
てしまった。ハングを越えると日が当たるので暑くてぐったりしてしまう。7ピッチ目草付きを右上していくが、確保点が不明瞭なので気をつけよう。私は気がつかず登り過ぎてしまい7mぐらいのチムニーの中でザイルが足らなくなってしまった。ハーケンも打て無い所だったのでセルフビレーも確保も取れないまま、佐藤氏に20m程登ってもらい何とか脱出した。足を広げたままだったので足がつりそうになった。やっとあと少しで稜線に出られるという所で、つかんだ頭ほどの石が抜けてしまい焦る。置く場所が無かったので、岩に叩きつけて二つに割り、クラックに詰め込んで登る。稜線に出て大休止。風が心地よい。お互いの写真を取り合ってから下り始める。

北稜を懸垂下降しようと用意していると、2人パーティが来たので『一緒に下りましょう』と言い、交互にザイルを出し合って下りたのでとても楽でした。下りる途中、道を間違えたり、蛇に出会ったりしたが無事一の倉沢出合に下った。

コースタイム

一の倉沢出合(5:05)ー取り付き(6:45)ー終了(9:50)ー一の倉沢出合着(13:40)

(告 記)



笛吹川・ヌク沢左俣右沢遡行

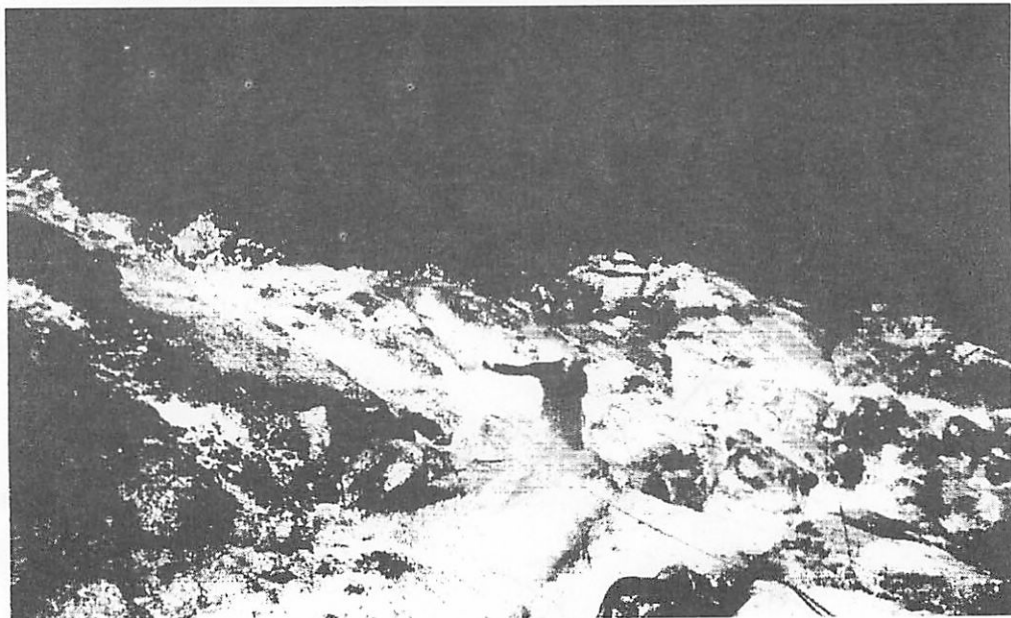
1995. 8. 6

パーティ L本図一統、佐藤文則、古山正文

この報告文の題名は遡行の経路を示した沢である。即ち、笛吹川の支流のヌク沢で、その途中に水量1:1で分かれている二俣を左に入り、更にその上部で水量1:1の奥の二俣の右沢を遡行するのである。右沢の上部には、沢登りルート図集“東京付近の沢”の表紙に載っている大滝がある沢である。

中央道を勝沼で降り、塩山に向かう。いつもこの辺りで葡萄畑や桃畑の間を縫う農道に紛れ込んでしまうのだが、今回はすりと塩山に入った。が、西沢溪谷に向かうところで道を間違え40分ほどロスってしまった。溪谷入口のバス停付近の村営の公園の駐車場に車を止める。

車止めか笛吹川沿いの車道を歩き右手に入口のある近丸新道をたどる。一体何を運ぶために作られたものか判らないが、所々に苔むした軌道の枕木と錆びたレールがあった。新道がヌク沢を横切る地点から遡行開始である。ゴーロとナメ床とナメ滝が交互に現れる。二俣直前に突然作ったばかりの堰堤が現れる。何でこんな所に堰堤が必要なのか？右俣の方の遠くには雁坂峠につながる国道の橋が見える。更に、二俣のすぐ



大滝260mの直登

上では堰堤の工事が行なわれていて、全く興ざめだ。ここからは更に綺麗なナメ滝が続く。沢がぐっと開け明るくなると数多くのナメ滝から構成された三段の260mの大滝が現れた。ルート図によると下100m、中80m、上80mの滝である。大体は流れの中をシャワーを浴びながら登る。中段の滝の途中で2ピッチ、ザイルを出した。上段の滝は途中から水流の右を登った。但し本図さんだけは直登。大滝を登ったところで小休止する。下界は猛暑だろうけれども、2000m付近の沢登りは涼しさを通り越して少し寒いぐらいである。この後もナメ小滝の連続で快適に登る。水の枯れた所で昼食とする。

ここからガレの崩壊で荒れた沢になるが、水線を忠実につめ、右の樹林帯に延びるハッキリとした踏み跡を発見。これを登ると、主脈縦走路に出て遡行終了。甲武信ヶ岳方面に歩き、道標にしたがって近丸新道を下り車に戻る。中央道に乗る前に交通情報を聞くとすでに笹子トンネルから渋滞が延びていて、高速に乗った途端渋滞の中となってしまう。更にその先も渋滞しているらしい。そこで柳沢峠を越え青梅街道奥多摩経由で帰ることにする。途中おいらん淵を覗いてみたりして快適に進むが奥多摩でとうとう渋滞に捕まってしまった。全員ぐったりとなって土浦に戻った。

コースタイム

笛吹川・ヌク沢左俣左沢

8月6日 車(6:45)－出合(7:36~7:54)－大滝上(10:45)－昼食(11:09~11:26)
－稜線(12:01~12:18)－下降点(12:28)－出合(14:10)－車(15:15)

(古山 記)



北岳バットレス・ピラミッドフェース～四尾根・継続登攀

1995. 8. 13～16

パーティ L古山正文、告広道、鈴木操

早朝のテント場の喧噪を後に、3名のアルピニストが大樺沢を足早に歩く。我々の目標はピラミッドフェース～四尾根～中央稜の継続登攀で、取り付きまで寡黙に登る。前夜の冷え込みと無風が今日の晴天を約束している様に見えた。

1ピッチ目古山さんがトップで登り出すが、草木の多いルートに少しがっかりする。告ちゃんとラストの私は2ピッチ目も左上するが、二人は疑い始めた。右にトラバースする意見に、もしも自分が初登する立場なら難度の高いラインを求めるはずと提案する。直登IV⁽⁺⁾のフェースは高度感も有り、Dガリー大滝を登るパーティを眼下に見ながら3ピッチ目は下部フランケのルートと平行する。沢から濃厚なガスが登ってくる。高度感が無く前方の様子が判らず、ピレーポイントでルートを確認するが難度は高くなっている。手足の力が入らず息切れがする。3000mの高度障害とすれば・・・『メスナーさん貴方は偉い!』左上する15mのクラックで、何と古山さんが4mほどコケタ。しかも無言で…。セカンドの自分もレイバックで挑戦したが、足が滑って成程と実感する。



北岳山頂・古山、鈴木、告

次は告ちゃんがトップに、私はまたも部外者の様に一人自己確保！。一人取り残された様な寂しさは何度もあったが、利点はザイルのキンクが修正されスピードが速い事。左上すると馬の背状の四尾根に出た。“アア～”20数年ぶりの感激に足がフルえる。昔と様子が変わり1ピッチ高い所が中央稜への下降点で、この間かなりの信号待ちである。他の登攀者に目をやると、父親と子供2名のパーティがいて子供の方は小3、小5の兄弟との事。スニーカーにTシャツの軽装にビックリ。父親は超ベテランとの事。

今回は時間切れで中央稜はあきらめ、明日2名でアタックするゆえ、取り付きからトラバース等の過去の記憶を伝える。やめるとなったら大休止！終了点のお花畑で菓子類を食べ、今日の安全を神に祈りながら良き岳友に恵まれ、ともに完登した喜びが五体を走る。日本第二の高所、北岳バットレスは強烈なメモリーで私の心の中に残るであろう。荷物の面その他に気を使ってくれた二人に只々感謝、感謝。有り難う。

(鈴木 記)



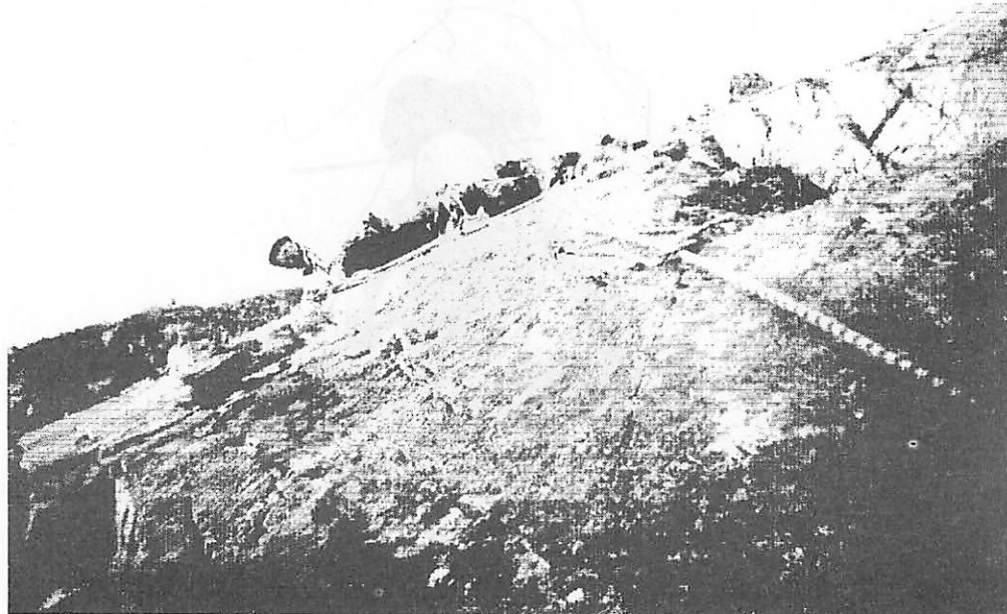
北岳バットレス・下部フランケ～上部フランケ～中央稜

1995. 8. 14

パーティ L古山正文、告広道

前日、渋滞していたので早朝2:30に起き、準備をして出発する。途中、大樺沢で四尾根に取り付くというパーティを追い越し、バットレスの下部岩壁に一番乗りをする。一息入れ、Dガリー大滝に私がトップで取り付く。私の靴は、今回の山行で下ろしたばかりの新品のクレッターシューズだったので踵が靴擦れを起こして痛い。

2ピッチで下部フランケ取り付きに到着。ルート図によればフェースV- になっているが、ルートが2本取れるのでどちらに行くか揉める。とあえず行ってみようと言うことになり、私がトップで右のルートに取り付く。難しい。ホールドが細かくどうしても上に上がれない。シュリングが下がっているが、指先が触れるだけで掴めない。ジャンプすれば行けそうだがホールドが細か過ぎてとてもジャンプするところではない。ザイルに掴まりいったん休めるところまで戻り、気合いを入れ直し最挑戦。全身が震える程、体を伸ばす。やった～！掴めた。シュリングに力を入れ体をズリ上げる。ちょっと休みたいがシュリングが今にも切れそうな程傷んでいるのでそのまま登る。ボルトが打ってあったのでそれに掴まりやっと立てるバンドに上がる。支点をそのボ



上部フランケを行く

ルトにとろうかと思ひ引っ張ってみたら抜けてしまい焦る。バンドを5m程トラバースして、ハーケンを見つけたので登ろうとするが、凄い逆層でフリーでは登れないので仕方なくアブミを出す。ハーケンは打ってあるが間隔が離れているのでここも結構緊張する。ザイルが30m伸びたところで確保。すぐ近くにピラミッドフェースを登っているパーティがおりルートが違うことが判りがっかりする。正規ルートに戻るために左に2ピッチの大トラバースをする。この間に、前日も一緒になった九州から来たパーティも登ってきたが、途中で断念して下りてしまった。何となく気分が良い。正規ルートへ戻り下部フランケ終了点に着くが、間違ったルートを登ったおかげでDガリー大滝をつめてきたパーティに上部フランケ取り付けで先を越されてしまう。3人パーティなのでスピードが遅くイライラする。古山氏に『上部フランケは先行がいて時間が掛りそうなのでDガリー奥壁にしませんか?』と言うが、中央稜につなげたいと云うことなので、仕方なく待つ。待ち時間が多かったので、上部フランケではピッチ数だけ煙草を吸ってしまった。

上部フランケ終了点で先行がDガリー奥壁に懸垂下降を始めたので“ホッ”とするのも束の間、今度は四尾根を登ってきたパーティがマッチ箱から懸垂下降してくるのが見える。息継ぎする間も無く登りなんとか抜かれずにすむ。もう待つのは御免だ! 前日の偵察通りマッチ箱の懸垂下降終了点から2ピッチ登ったところから中央稜へ懸垂下降する。1ピッチ目、落石に注意をしながら25m空中懸垂。2ピッチ目、70度くらいの斜面を40m懸垂下降して中央稜の末端に着く。人はいないのに綺麗なザックが転がっており、何となく気持ちが悪い。落石が恐いのでハングの下で昼食をとる。

中央稜は、私がトップでノーマルルートに取り付く。ここは他の場所と違って岩がやけに尖っている。1ピッチ目、登りすぎてしまい確保点が見つからず焦る。45mぎりぎりまでハーケンが2本打ってありハンマーで確認してから使う。古山氏には登り過ぎたと怒られる。2ピッチ目、古山氏がトップで行くがザイルがよく流れず苦勞している。霧が晴れて来た。何という高度感。何でもないと云うのに足がギクシャクしてギゴチ無い。そこから3ピッチ登りザイルを解く。長かったせいか満足したと云うより満腹感でいっぱいだ。歩き始めるとほどなく頂上に着いた。後は歩きづらい草スベリを下り、鈴木氏の待つ御池小屋を目指す。

コースタイム

御池小屋発(3:40) - 取り付け(5:30) - 下部フランケ終了(8:04) -

上部フランケ(10:43) - 中央稜終了(14:54) - 御池小屋着(17:15) (告 記)

剣沢大滝ルート工作（その1）

1995. 8. 12～15

パーティ L 高桑信一、池田知佐子、大久保浩（以上浦和浪漫山岳会）、本図一統

今年の2月頃だったと記憶しているが、関東沢屋交流会の席上で、たまたま高桑氏と席が隣り合わせになった。そして、ヒョンなことから剣沢大滝に行く話がまとまってしまったのである。実は別な人から剣沢に誘われていたのであるが、日程の都合でお断りせざるをえなかった。高桑氏とは、以前、下田の白根沢に行ったことがあるし、今年の徒渉訓練にもお世話になっているので気心は知れているが、他の2人とは初めてなので、チームワークについて不安がなかったわけではない。しかし、浦和浪漫山岳会の雰囲気はある程度知っていたので、そんなに心配はしていなかった。

私は剣沢は4回目である。1回目は、所君とI滝下まで行ったが、あの瀑風下の徒渉ができず敗退した。2回目は春に生井、高田両君と行った。しかし、ゴルジュ入口の雪渓が目前で大音響と共に崩壊しルートを断たれた。危機一髪の生還であった。3回目は所、生井両君と行ったが、ゴルジュ入口で追い返された。そうこうしているうち、剣沢に付き合ってくれるパートナーは、いなくなってしまったのである。『俺は剣沢を登るまでは山をやめられない』と、私はいつも口癖のように言っていた。その口癖も最近ではなくなり、半分諦めの心境になっていた。友人に剣沢はどうしたと聞かれるたびに、ウ～ンツルギサワネ～とお茶を濁していた。剣沢に行くことが決まると、鎮火していた心の炎が、メラメラと燃え盛るのを感じた。そう、この剣沢こそが私の登山人生のすべてなのだ。クラブの合宿と重なったが、私のわがままをお許しください。

8月12日。晴。扇沢で川浦さんと行き会う。川浦さんは、3回目の剣沢の時知り合った、関西電力関係の会社に努めるおじさんである。今回は川浦さんのお世話で、仙人平まで文明の利器を利用させてもらうのだ。つまり、大町トンネル～黒部トンネル～インクライン～仙人平～十字峡のルートで入谷するわけである。黒4ダムまでトロリーバスで行き、川浦さんのトラックに乗り込む。一般には開放されていない黒部トンネルをぶっ飛ばす。トンネル終点がインクラインの乗場である。インクラインとは、関西電力専用地下ケーブルのことで、高度差456m、斜度34度、長さ815m、最大積載能力25トンという、とんでもない怪物なのだ。これに20分乗り、12分軌道上を歩いて仙人平にでた。扇沢からずっと地下の中にいたので仙人平の光が

とても眩しい。
久しぶりの黒部
下の廊下だ。や
はり黒部はいい、
黒部の谷や岩は
本気にならなけ
れば登れない。
柳又では左踵骨
骨折という痛手
も受けている。
私はそういう黒
部がとても好き
だ。今日の荷物
は重いが道程は
楽なのでゆっく
り行く。途中、
水のある所で池
田特製のおにぎ
りを食べる。十
字峡までは、予
想したとおり半
月沢の所が少々
悪かっただけで
昼過ぎには着い
た。なつかしい



第一チロリアンでの本図

十字峡だ。浪人中の弟を連れてきた十字峡。ハヤブサが飛んだ十字峡。大雨の十字峡。想い出多き十字峡だ。今回はここにベースを設けルート工作をする。すると大阪わらじの会の2人がやって来た。一種独特の雰囲気を持つ彼らは、いかにも登れるといった風体をしていた。昨年大滝を登ったという彼らは小休止後、古いザイルのチロリアンで棒小屋沢に入渓していった。ベース設営後、高桑、大久保、本図の3名で第1チロリアンまでルート工作にでかける。今年は残雪が多く感じられた。大久保氏のジャンプで難無く工作を終える。

8月13日。晴。高桑、大久保、本図の3名で工作に行く。第2チロリアン、第3チロリアン、共に大久保氏のジャンプで終了。さすが沢屋さんは水を見る目が違う。自分では、ここなら渡れるんじゃないかと思う場所とは微妙に違うのである。大変勉強になった。第3チロリアンを過ぎると左岸台地に行く。いよいよゴルジュ入口である。ショルダーで大岩を越すと、I滝への第1ハードルといえる岩場だ。ここは自称岩屋の私が行くほかあるまい。でなかったら私がついて来た意味がない。別に存在感

を意識したわけではないが、専門分野の違う仲間が同行する強みはこんなところにあるのだろう。ルートファインディング通り登ってみると簡単に登れた。さらにショルダーを1カ所すると、第2ハードルと言うべき右岸への徒渉地点だ。前回来た時は泳いだ所だが、今日は歩いて行けそうだ。



大滝I滝

とは言っても水深はヘソまであり流れも強い。私なら、ちょっと躊躇するところではあるが、高桑、大久保両氏はガンガン行ってしまう。Ⅰ滝下の徒渉は前回敗退した苦い経験のある所。今回は浅くなっており簡単に渡れた。瀑風は相変わらずで滝の方を向くと呼吸ができない。台風の本只中にいるようである。凹角ルンゼを少し登ってから、ザイルをだして20m登ると瀑風の当たらない快適なテラスにでた。ここが大滝への取付点である。初めルートが分からず少々迷うが、やがて確認して本日はここまでする。帰りは剣沢平で焚火をして、お茶を飲みベースに戻る。

8月14日。晴。今日は池田さんを含め全員で大滝に向かう。ルート工作はバッチリなので不安はない。ぜひ池田さんを大滝下まで案内したいと思っていたので、連日の好天に感謝しながら大滝を目指す。池田さんはⅠ滝下の瀑風の中でも恐いという表情はまったく見せず、今自分がここにいるということを心の底から楽しんでいるようにみえた。例のテラスで池田さんと大久保氏は待機し、高桑さんと私は焚火のテラスまでピストンすることにする。1ピッチ目、急な岩場を登る。残置は所どころにあるが、チャンネルハーケンを1本打ち加える、40m。2ピッチ目、岩場から木登り25m。3ピッチ目、木登り43m。4ピッチ目、岩場から木登り35m。5ピッチ目、懸垂20m。6ピッチ目、傾斜のゆるいブッシュ帯15m。で待望の焚火のテラスに到着した。D滝の一部、その右に緑の台地とそれに続く急な岩稜が見える。圧倒されるほどの迫力のゴルジュが展開するものの、残念ながらここからゴルジュの底は見え



Ⅰ滝での高桑氏、池田さん、大久保氏、



焚火のテラスでの本図

ない。焚火のテラスは1坪弱の快適なテラスで、次回はここでビバークしようとガッチリ握手。ただ問題は水をどうするかだ。まあ解決方法は見つかるであろう。お茶を沸かし、おにぎりを食べる。こんな所まで来ておにぎりを食べられるなんて、朝早く起きて作って下さった池田さんに心から感謝した。下降手順を打ち合わせ、下降に入る。打ち合わせ通りスムーズに2人の待つテラスに降り立った。あとは全員で途中焚火をしたりして、ゆっくりベースに戻った。ベースでは今回の山行の成功を祝して宴はかなり盛り上がった。池田さん、朝昼晩と下界でも食べないおいしいものを、毎日御馳走してくれて本当にありがとう。特にあのカレーは一生忘れられないほどおいしかった。

8月15日。晴。計画通りの行動をすべて終了したので黒部本流で釣りをする。高桑、大久保両氏ともに良型のイワナを釣り上げ、早速刺身でいただく。私も挑戦したが、どうも私が釣るときは魚がトイレでも行ったらしく、釣果は0だった。ベースを撤収後、入山の時休んだ同じ場所でソーメンを食べ、仙人平に向かう。仙人平まで来た時、ついてるというか、運が良いというか、関西電力専用上部軌道の電車が来た。手を挙げると快く乗せてくれた。インクライン駅までは川浦さんが迎えに来て下さっており、見なれない角度からの剣岳を見せていただいたり、コーヒーを御馳走になったり、ずいぶんお世話になってしまった。そして最後は扇沢まで送ってもらってしまった。

尚、10月にもう1度ルート工作をする予定である。

19号に続く……お楽しみに

8月12日 扇沢(8:30)－仙人平(9:58)－十字峡(12:36~15:00)－ルート工作
－十字峡(17:51)

13日 十字峡(7:11)－ルート工作－十字峡(17:46)

14日 十字峡(7:01)－ルート工作－十字峡(18:38)

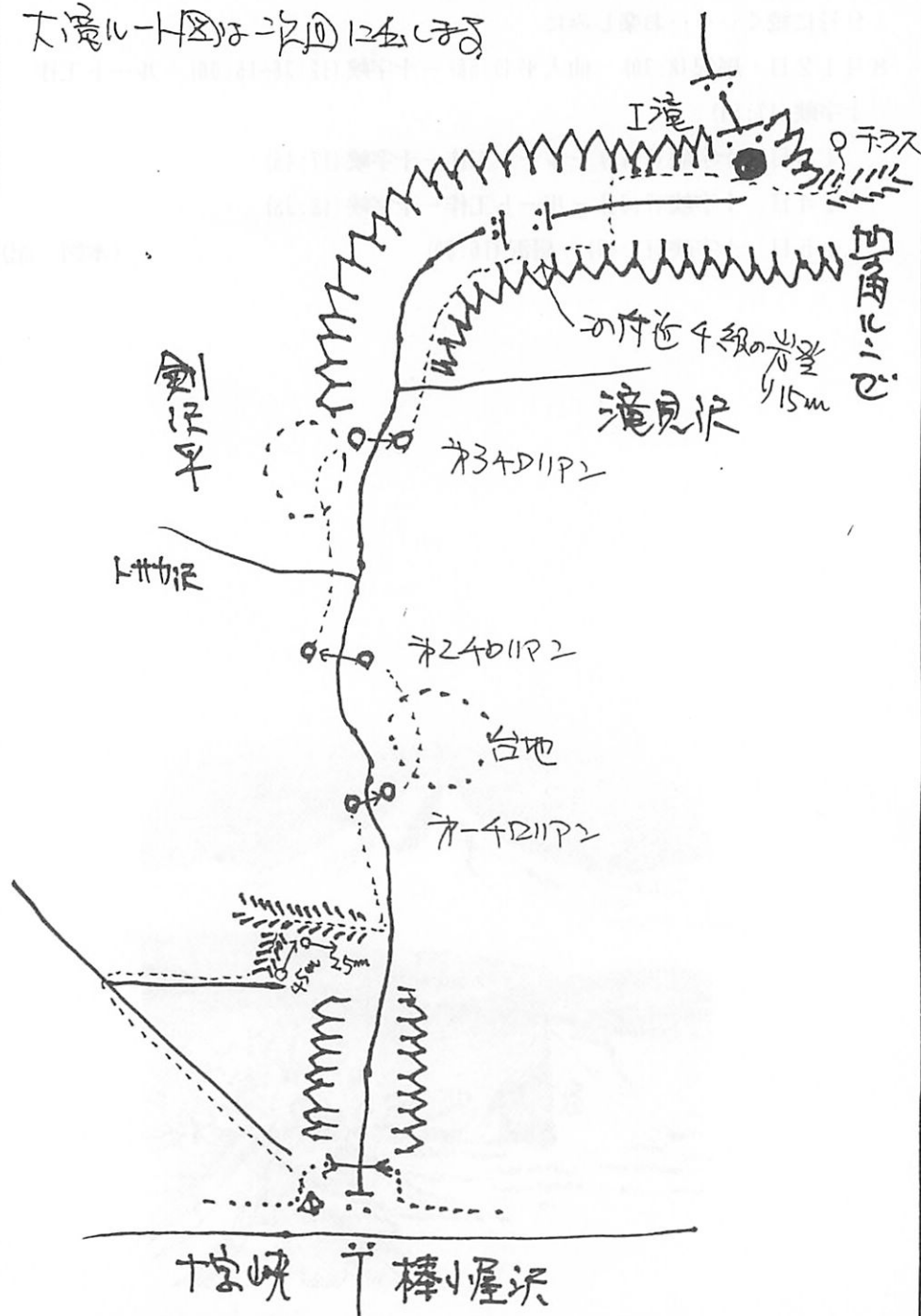
15日 十字峡(11:47)－扇沢(16:00)

(本図 記)



ルート図	剣沢 (十字峡 → I 滝)	作図者	阿部一統
------	----------------	-----	------

大滝ルートは②⑩にある



メンバー	高桑 池田 大久保 本図	進行日	H 7. 8. 12 ~ 15
------	--------------	-----	-----------------

谷川岳赤谷川本谷

1995. 8. 19~20.

パーティ L古山正文、佐藤文則

赤谷川本谷には普通には見ることの出来ない7段の滝からなる”ドウドウセン”がある。2年ほど前にこのドウドウセンに登りに行こうと、本図さんから資料をもらっていたが、恐ろしそうな所様の様なのでなんだかんだと理由をつけて逃げ回っていた。しかし、遡行図によると、大きな滝は下流から、マワット下ノセン、マワットノセン、裏越ノセン、ドウドウセン、ドウドウセン上の8mの滝、の5つあるのだが、普通に直登できるのはマワットノセンだけで、これを含めて右岸から高巻くのが一般的であるらしく、夏の週末を涼しく過ごすために、行ってみることにした。

下館から、佐藤君のビッグホーンで、川古温泉に向かう。翌朝準備をして出発すると車止めのゲートが開いているので、車で入ろうと戻って車で進み直すと、すぐ先に新しいゲートがあり結局ここに車を止めて歩いて行く。我々の進行方向にのみ雲が広がっていて、気が重くなる。赤谷川の左岸を進み、赤谷川を徒渉する地点から入溪。すぐにマワット下ノセン、マワットノセンを高巻く。その後、巨岩帯となり左壁と巨岩の境目の木の生えた辺りを苦労しながら登る。このころから快晴となり、暑い。巨岩帯を過ぎると裏越ノセンとなる。この滝は、ルート図集”関東周辺の沢”の表紙に載っている。滝壺の7~8m上が広い段になっていて、流れ落ちる滝は滝壺にあたるため、ちょうど滝の裏側を歩いて右岸に渡りルンゼに入って大高巻をするのである。しかし、滝壺は埋まって小さくなっているために膝下ぐらいの徒渉で右岸のルンゼに取り付けた。20分ぐらいで滝上に出る。そこはドウドウセンの入口であるが、谷が左に大きく曲がっているので様子を見ることができない。いつか再びここに来るだろうか・・・？左から入る沢（日向窪）から大高巻き開始、しばらく行くと右から入るルンゼに登る。岩が出てきたところを右にトラバースぎみに木登りをし、稜線に出る。稜線を少し登るとはっきりした踏み跡となった。さっきの岩の所を左に登れば良かったらしい。降りるべき本谷の右岸のスラブが白く見える。スラブの右（上から見て）の灌木帯との境目を下り、ドウドウセンの上に降りる。暑い中を50分もかけた大高巻きだったので、しばらく沢に浸かり涼をとる。滝上からは3段ほどドウドウセンのなかの滝を見ることができた。その内の一段は水の出口のない滝壺である。ドウドウセンの上はこれまでのゴルジュ的な谷から一変し谷は緩くなり草原地帯を登るような

感じであり、この部分だけを登るパーティもいるらしい。8m滝を右岸から高巻く以外は困難な部分はなく周りの景色を楽しみながら進む。谷が右に大きな曲がり、左から万太郎山からの沢と交差する台地にツエルトを張り、ビバークとする。薪が余りなく、川原での焚火は少し寂しいものだった。下界は熱帯夜だけれども、ここは涼しさを通り過ぎて少し寒いくらいであった。

翌日も快晴。幅の狭くなった沢を部分的には膝下ぐらいの徒渉をしながら行く。スノーブリッジを2箇所ほどくぐり、オジカの頭に向かって沢をつめる。少しの藪漕ぎで頭直下の登山道に出る。夏の太陽にじりじりと照らされながら、万太郎山、毛渡乗越しへと、国境稜線を歩く。稜線からの眺めは抜群で、昨日登ってきたドウドウセン上の谷が一望できたし、反対側には新潟魚沼の盆地がひらけているのがよくわかった。毛渡乗越しからは川古温泉への登山道を下る。本谷の徒渉点で休んで、昨日来た道に戻る。とても熱い湯宿温泉によって、帰路についた。

コースタイム

- 19日 川古温泉(6:20)－徒渉点(8:00-8:30)－マワット下ノセン(8:50)－
裏越ノセン(10:15-10:40)－ドウドウセン下(11:10)－
ドウドウセン上(12:00-13:00)－ビバーク地(15:00-6:00)
20日 ビバーク地(6:00)－オジカの頭(8:30-8:50)－万太郎山(10:20)－
毛渡乗越し(11:00)－徒渉点(12:10-12:40)－川古温泉(14:10)

(古山 記)



奥多摩・川苔谷逆川

1995. 8. 20

パーティ L 本図一統、笹沢ひろみ、大崎真奈美、今井弘

8月19日、私が仕事を終え、その足で集合場所の下妻市役所へ行ったのは約束の時間を30分も遅れた9時30分だった。本図、笹沢、大崎の3名は車の中でビデオを見ていた。(○○○○のビデオだったかは知る由もない・・?) 9時40分市役所を出発。16号線内回りを通り、川乗川に午前1時に着いた。

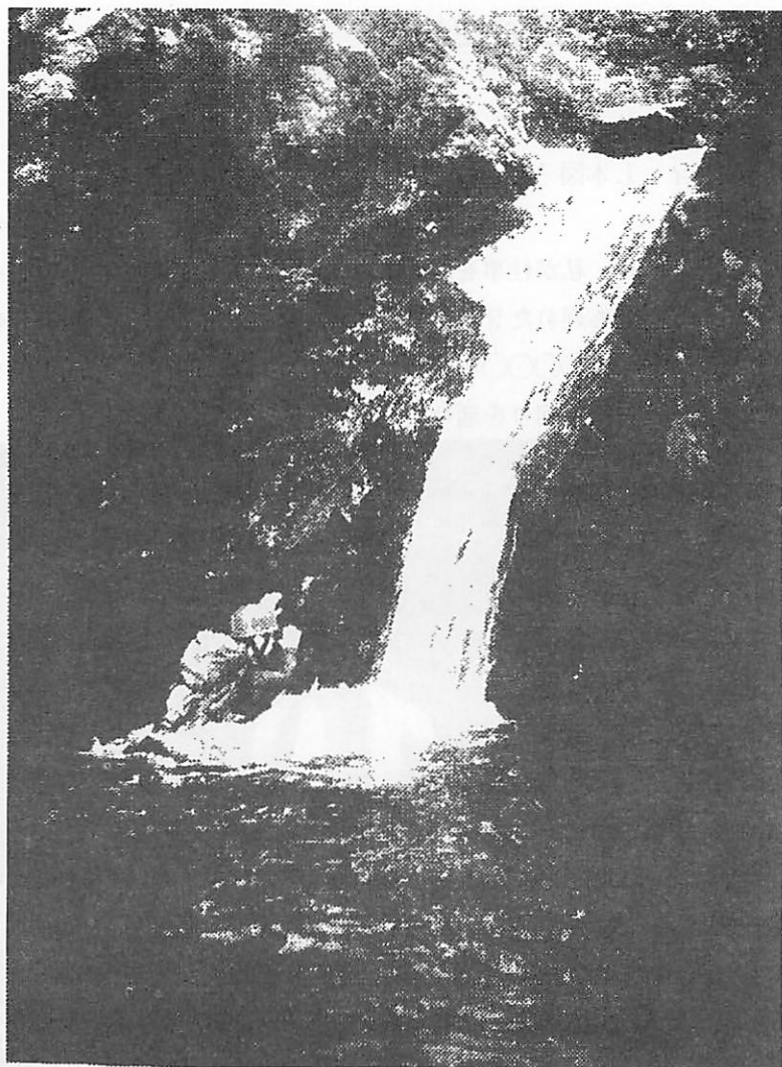
翌朝、7時に目が覚めた。というより車の音で目を覚ました訳だが。逆川は人気のある沢で車が2台も来ていた。どうして車の音が気になったかと言うと私と本図さんは車の外で寝て、笹沢さんと大崎さんは車の中で寝たからなのである。繊細な私には、車の音がしてはとても寝てはいられない。何で自分はこんなに繊細なんだろうと思いつきながら起き出した。すると本図さんも起き出して車の中の2人を見て



逆行中の今井、大崎、笹沢

いるようである。
本図さんは、彼女達を見ながら『幸せそうに眠っているのを起こすのもかわいそうだよな～8時30分まで寝かせてやっぺ』と優しく言った。

8時30分起床
食事をして9時に出発した。沢の降り口を捜すのに1時間もかかってしまった。沢を降りるとすぐに10mぐらいの滝が有ったが、ここは軽く巻いた。それから滝が3つ程あったが、それぞれの釜を泳いで渡った。



シャワークライミングにアタックの笹沢

火照った体には丁度良かった。12時45分昼食にした。本図流沢料理、天ぷらとそうめんを約1時間かけて食べた。

14時55分右岸にトラバースして沢登りは終了し、17時03分車に着いた。帰りは渋滞もなく下妻に22時30分に着いた。入会して初めての山行で、大崎さんはちょっと疲れたみたいだった。

コースタイム

苔谷逆川8月20日 車(8:40)ー終了(14:45~14:55)ー車(16:36)

(今井 記)

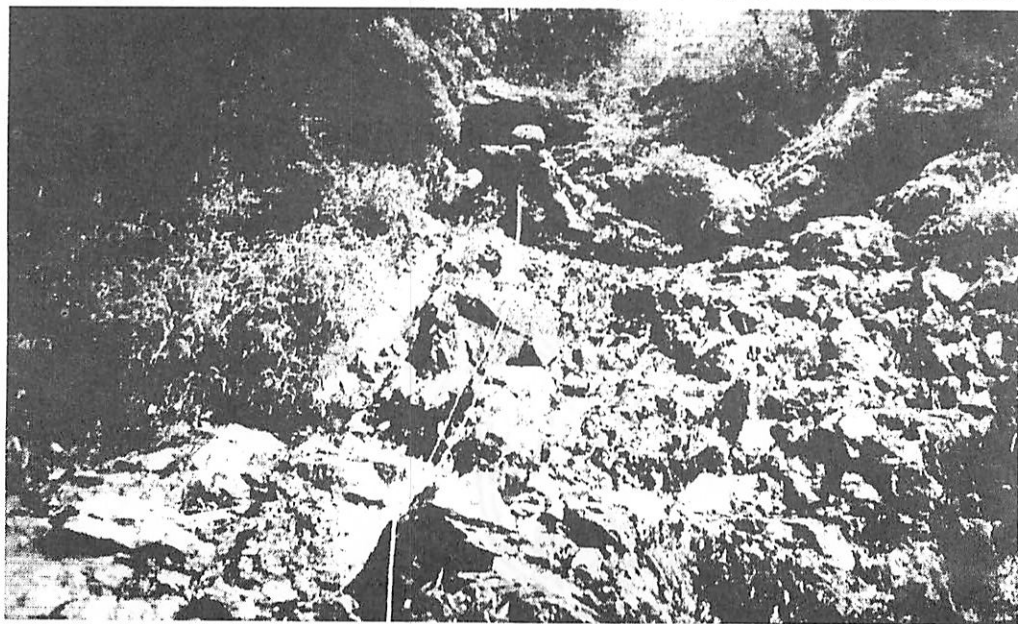
裏丹沢・神の川・ミクボ沢

1995. 8. 27

パーティ L本図一統、古山正文

ミクボ沢には右俣、本流、左俣があるが、今回は、この全てを歩き回ろうという豪華な沢登り+沢下りの計画であった。登山体系によれば、右俣には大きな滝があり、本流には20mの滝が霧となって落ちていて、登攀意欲をそそられそうである。中央道の相模湖東で高速を降り、青根を長者舎山荘、陰沢橋脇の神ノ川ヒュッテに向かう。途中の青根で登山届けを出そうと赤電灯の点いている駐在所に入ると何とそこは消防署の分署で、本当の駐在所はかなり前に通り過ぎてしまったらしい。帰りに声を掛けると云うことで、登山届けを預かってもらうことになった。その当直の人は珍しいものでも見るように登山届けをしげしげと眺めていた。

神ノ川ヒュッテの付近は有料駐車場になっているので、その手前の道路の待避場に駐車する。車の中は暑いので道路にマットを引き寝る体制をとるが、マットを通してじわじわと道路の熱が伝わってきてとても寝苦しかった。車止めから犬越路の車道を歩き小洞隧道を抜け、小洞堰堤の見えるところから林道の踏み跡を下って、堰堤の上の河原に出る。地図によれば、堰堤下の右岸から入っている沢がミクボ沢、堰堤の上



“右俣” 25m滝を直登する古山

の右岸から入っている沢が小洞沢らしいのだが、どちらもこんな小さな沢なの？という感じで迷ってしまった。上流を偵察に行くが沢は入っていなかった。結局、地図が正しいだろうと云うことで（当たり前か？）、ミクボ沢に入る。ミクボ沢はいきなり源流であった。いくら好天続きだからといってこの水量はないだろう。いきなり登攀意欲をそがれる沢であった。トヨ状のチョロ滝を登り、8m滝は左を巻き、20mの滝の左のルンゼを登り巻くが、ルンゼの奥まで登って（赤布有り）右にトラバースしようとしたがボロボロの岩壁に一步が出ず思案していると、下からトラバースした本図さんが上まで登っていたので、ロープを下ろしてもらいようやく通過できた。その上で右俣に入るが、ガレ場ばかりとなりうんざりしたので、上に抜けるのを止め藪の中をトラバースし本流に移動しこれを下る。一度小さな懸垂で滝を下り、ハングした霧状の滝の右岸を懸垂で下り、本流下降を終了し左俣に入る。左俣に入るとスラブの小滝が現れる。この後、たいしたガレ場もなく30分程で風巻尾根の東海自然歩道に出て、終了。この道を下り車に戻った。犬越路トンネルが通過可能らしいので、帰りはそれを通して、途中中川川の東沢の本棚沢迄の林道を往復し本棚沢の入渓点を確認する。後は中川川沿いの道を、多くの沢遊びの人たちを眺めながら進み、丹沢湖を通じて、大井松田ICから東名高速に乗り、池袋の秀山荘、新大久保の石井スポーツによって登山道具を買い込み、土浦に戻った。（昨日の消防署の分署には途中で電話を入れたのはいうまでもない。）

丹沢・神の川ミクボ沢・コースタイム

8月27日車(6:19)－出合(7:28)－左俣出合(10:14)－稜線(10:37~11:06)－車(11:55)

(古山 記)



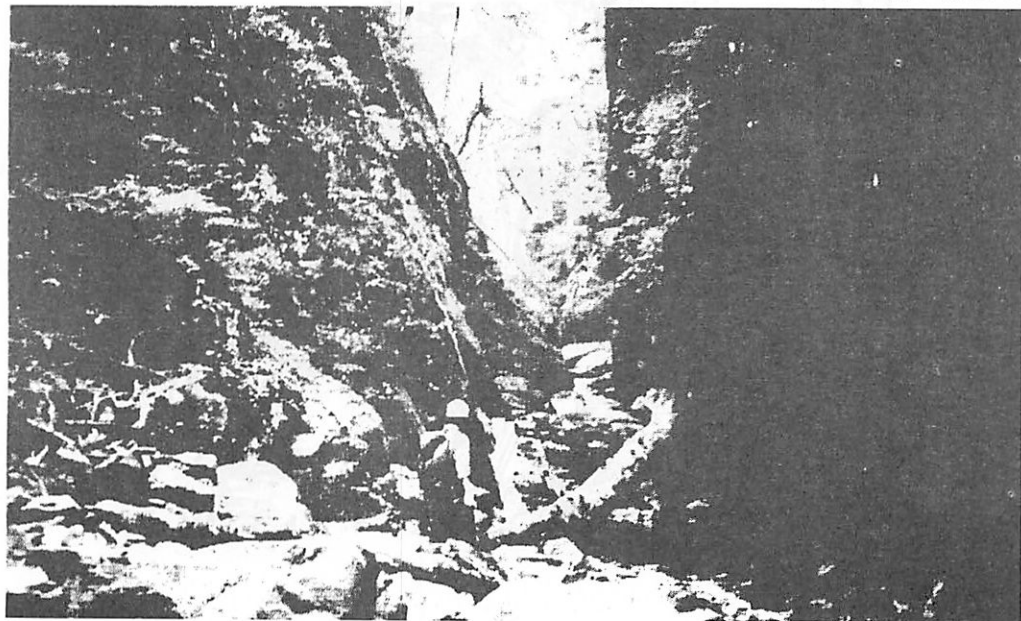
奥秩父・一ノ瀬川大常木谷一竜喰谷

1995. 9. 10

パーティ L本図一統、古山正文

最初は笹沢さんも加わって沢へ行く予定だったが、彼女が風邪気味のため欠席となった。我々は、15～17日に不動川遡行が控えているので、体調を整える目的もあったのでこの沢登りに向かった。下妻―大宮―川越―青梅―奥多摩―丹波と走行距離が15万Kmに近づいたながらも、本図さんのデリカ・スターワゴンは快調に力強く進み、目的の大常木谷の入渓点近くに駐車。

大常木谷出合よりも下流の本流に降りたので、本流を少し遡行する。大きな釜がいくつかあって、泳いで越すのかと一瞬思ったが、右岸に高巻き跡がありそれに行く。出合から大常木谷に入る。高巻きの道があるときはきっちりとそれを使わせていただく。小さなゴルジュ”山女魚淵”を通ると核心部は終わり、山頂まではかなり長いゴロ歩きとなる。隣の竜喰谷に移るため、右岸の会所小屋跡から大常木林道を通りモリ乗越しに向かう。反対行けば去年行った小常木谷の岩岳尾根である。途中で竹箆をしまった茸採りのおじさんと出会う。茸はまだはえてないらしい。モリ乗越しを少し過ぎた辺りから登山道を外れて谷に向かって下る。竜喰谷もおもしろい滝は下部に集まっ



ゴルジュを行く

ていて、上部は長いゴーロ帯らしい。竜喰谷本流に下ったところは、予定どおり下部の滝が終わるすぐ手前の所（中ノ平沢下の8m逆くの字滝上）であった。ここから下り始める。この谷の滝にもすべてしっかりした巻き道があり、きっちりと使わせて頂いた。一ノ瀬川本流出合からほんの10m位右岸を上がって車道に出て、20分程戻ると車についた。今回も午前中で終わってしまった。回り道をして上流にある一ノ瀬の集落を通して、青梅街道に出て帰路につく。池袋の秀山荘に寄って、不動川用のウエットベストを購入し、さらに水道橋のさかいやで沢用ズボンを物色して帰った。こんな様な”お買物山行”は2～3週間前にもあったような気がする。

大常木谷・コースタイム

9月10日 車(7:17)－出合(7:53)－終了(9:47~10:07)－モリのコル(10:47)

－竜ばみ谷(11:15~11:26)－一ノ瀬本流(12:16~12:24)－車(12:45)

(古山 記)



前穂四峰正面壁甲南ルート

1995. 9. 14～16

パーティ 今井弘、他1名

前穂四峰正面壁甲南ルートを登ろうと言われたのは、出発する一週間前中村さんの家でお酒を飲みながらの会話での事であった。私には無理と思い、7月に前穂四峰正面壁北条・新村ルートを登った古山さんに電話し、聞いてみたら『甲南ルートだったら大丈夫ですよ』との答えが帰ってきた。その言葉を信じ行く事に決めた。

9月14日、早朝
4時守谷の中村さんの家を出発した。本庄・児玉インターから高速道路に乗り、佐久インターで降りた。県境辺りから雨が降ってきた。途中事故渋滞の為30分ぐらい遅れて、11時15分に沢渡に着いた。そして11時40分発のバスに乗り、12時19分に上高地に着いた。上高地は雨が降っており、雨合羽に着替え13時にバスターミナルを出発した。徳沢15時15分、中畠新道16時、奥又白の池に18時20分に着いた。薄



前穂4峰正面壁

暗い雨の中でテント設営、台風前の平日なので、我々のテント一張りだけだった。

9月15日、昨日からの雨はまだ降っていた。今日も一日雨かもしれないと思い、諦めて濡れた衣類をコンロで乾かしていた。9時頃雨が上がりガスが消えてきた。ラジオの天気予報を聞くと、午後から晴れるということなので軽く食事をして11時30分にテントを出発した。木苺とブルーベリー（多分そうだと思うけど？）の中夏道をトラバースして雪溪に出た。雪溪は小さくアイゼンを着けずに雪溪を左側に巻いた。13時C沢に入った。しかしチョックストーンが無いのである。ロープを着けず登っていた中村さんは進退不能になってしまった。沢を間違えたらしい。私は右壁を登り中村さんの上に行き灌木を支点にしてロープをさげた。中村さんが登ってきて『沢を間違えたが甲南バンドはここじゃないかな』しかし甲南バンドの何処の辺りかわからなくなった。わからないまま甲南ルートらしい？ルートをザイルを着けて登って行った。

1P, 2P, 3P, 4P, は快適に登攀できた。しかし5P目でオーバーハングが出てきた。ガイドブックではⅢ、A0と書いてあった。30分ぐらい頑張ったが突破できなかった。中村さんとトップを交替した。中村さんも突破できなかった。この時甲南ルートでは無い事に気付いた。時計を見ると午後4時で山の影が長くなっていた。時間が無いので下降することにした。2回懸垂下降して甲南ルートらしきところに降りた。テント場に着いたときには、18時52分になっていた。

9月16日、霧雨。4時30分起床。クラッカー5枚、チーズ5枚とコーヒーの朝食を取り、5時30分テント場を出発。C沢6時57分。しかし昨日降りたC沢にしては変なのである。もう少し登れば思い出すのでは？と思い、沢を登ったが次第に不安になった。岩がぼろぼろで瓦みたいに剥がれるのである。中村さんが登る時落石するのでそのたびに岩の影に身を寄せた。どうもB沢の枝沢に迷い込んだようである。B沢で恐怖の落石音がした。私は一刻も速くこの場所を脱出したいと思った。8時に枝沢の頂上に着いた。雨が強くなってきた。頂上には、ボルト2本と残置シュリンゲが有った。懸垂下降2回でB沢の入り口近くに降り、テント場に9時32分に着いた。

テントの中でラジオの天気予報を聞くと明日は今日より悪くなるということなのでテントを撤収して12時20分、奥又白の池を後にした。徳沢園15時30分、上高地バスターミナル17時30分に着き、18時の最終バスに乗り沢渡に着いた。

今日は友人の弟のペンションに泊まり、翌朝9時50分にペンションを出発して守谷に17時に着いた。

今回は台風12号に登攀を台無しにされたが、奥又白の池は神秘的な池で又来たい

場所となった。

コースタイム

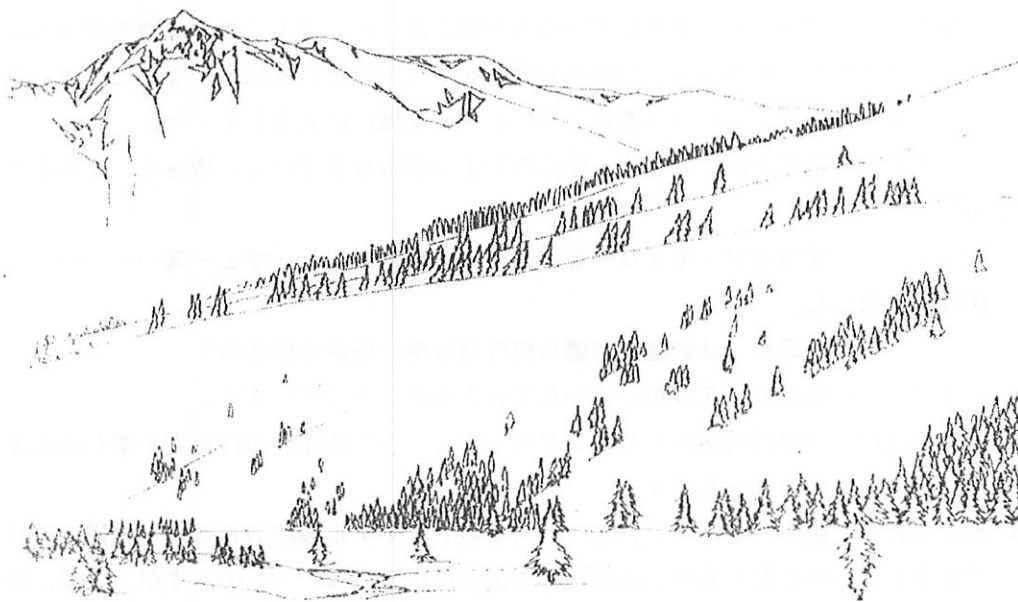
14日 上高地(12:19)－徳沢園(15:15)－中畠新道(16:00)－奥又白の池(18:20)

15日 奥又白の池発(11:30)－奥又白の池着(18:52)…敗退

16日 起床(4:30)－奥又白の池発(5:30)－C沢(6:57)－B沢枝沢ピーク(8:00)

奥又白の池着(9:32)－奥又白の池発(12:20)－上高地(17:30)－沢渡(18:00)

(今井 記)



新人紹介

《〇〇氏の山談義》

今回は新人が2人も入会したので、このコーナーで紹介したいと思います。
最初は舊い稲妻` 的新人の笹平孝君。彼はかなりの有望株である。これから
頭角を 現わし大活躍しそうである。

そして、もう一人がマライヤ・キャリアもびっくりの期待のニューフェース
大崎真奈美さん。彼女もダイヤの原石と云ってもいいでしょう。磨けば光るも
のがあります。では、2人から自己紹介、ACC-J茨城の感想、これからの
抱負について話してもらいましょう。

まずは、舊い稲妻` 笹平 孝君。……。

『平成7年9月に入会した“笹平 孝”と言います。昭和47年3月25日生まれ。
茨城県岩井市にすんでいます。』

山に興味を持ったのは、高校生の時で、山岳部に入っていました。高校生の時は、
あまり遠くに行かず、主に関東周辺の山に登りに行っていました。就職してからは、
毎年盆休みに山に行くぐらいで、冬山などの経験は有りません。

今年は北アルプスの剣岳に行ってきました。山で渋滞の中、回りを見渡すと、遠く
の岩場でロッククライミングをしている人が見えました。『よくあんな所を登るなあ』
と思っていました。そのうち、自分も岩登りをやってみたいと思うようになりました。
それで、登り方を教えてもらう為に、ACC-J茨城に加入しました。

高所恐怖症の私ですが、足を引っ張らないよう頑張りますので、皆さん、よろしく
お願いします。』

続きまして、マライヤ・キャリアもびっくりの期待のニューフェース……………。
大崎真奈美さん。

《ACC-J茨城の皆様へのラフレターのようなもの》

『若葉マークの私の入会を許可していただきありがとうございます。』

最近ではだいぶ専門用語のヒヤリングも上達してきて皆様の山行報告を楽しめるよ
うになってき始めたところです。

以前から野外で遊ぶのが好きで、オートバイのトライアル競技の真似事や林道ツーリ
ング等をしていたことも有り、山は決して遠い存在ではなかったのですが、イザ、身
体一つで入ってみると、今まで到底、壁でしか有りえなかった場所が“道”になる。
見上げる対象だったものを見下ろすなど、全身カルチャーショックの連続でした。』

『早くオールシーズン・オールラウンドの山行を経験したいなあーと焦っているのは相変わらずなのですが、せっかく長年の憧れ（実を云うと10年近くも片思いだったのです。）だったことに足を踏み入れたのですから一回一回を十分に堪能していこうかなと思ってます。

仕事の関係上、なかなか思うように土、日、祝日のお休みが取れず、指をくわえているのが残念なのですが、それでも……。もうすでにご苦労をおかけしている方々には感謝で、い—————っぱいです。

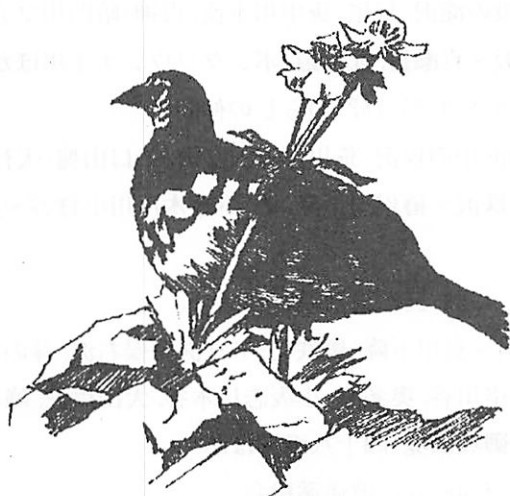
それに、これから後負担をかけることになるあなたにも（なるべくなら短期間で半人前程度にはなっておきたいのですが……。）よろしく御指導お願い致します。

最近は飼犬の“フッ君”（巨大な血統書レス犬）に毎日散歩に連れて行ってもらっているので、たくましい脚線美になりつつあります。うれしい限りです』

意欲的な挨拶ありがとうございました。お二人の意欲的な熱い思いに、我々ロートルも若かりし日々、同じように情熱的だった頃を懐かしく思い出しますネ。これからの活躍を期待しています。

次回より〈〇〇氏の山談義〉コーナーを始動します。リレー方式でACC-Jの輪の中を回していきますので、皆さん心の準備をしておいてくださいネ。

まずトッパッターは、我が会の会長「鯉河」氏にお願いします。皆さんは「天の声」と思って期待して待っていてください。



《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 123 1995. 7 B5 24P 浦和浪漫山岳会

赤湯～サゴイ沢～赤倉山～苗場山～祓川、刃物ヶ崎山・矢木沢ジロウシ沢四の沢～
本流下降、笛吹川渡沢ナメラ沢、会越・大白沢奥壁右端スラブ状ルンゼほか

◎Rohman NO. 124. 1995. 8 B5 42P 浦和浪漫山岳会

1995夏山合宿・川内・仙見川流域、川内山塊・五十母川持倉沢～日本平山～谷沢川ケ
ナシ沢下降～谷沢川本流下降～鍋倉山ほか

◎Rohman NO. 125. 1995. 9 B5 48P 浦和浪漫山岳会

会越・蒲生川大白沢奥壁右端スラブ状ルンゼ、南会津・安越又川西沢～ミチギノ沢
下降～御神楽沢～駒ヶ岳、大津岐大沢岐沢下降～小ヨッピー川、奥利根・奈良沢三ツ
石沢、川内・倉谷沢左俣～駒形山～室谷川西の沢～東岐沢～東岐山～大久蔵沢～室
谷、南ア・早川黒桂河内二の右俣、万太郎谷本谷、赤谷川本谷ほか

◎月報・ZAC NO. 165 1995. 6 B5 14P グループ・ゼフィルス

山菜コンパ、奥多摩・小袖川、残雪期の利根川源流横断ほか

◎月報・ZAC NO. 166 1995. 7 B5 6P グループ・ゼフィルス

湯桧曾川本谷、丹沢・玄倉川小川谷廊下ほか

◎わらじ NO. 472 1995. 7 B5 36P わらじの仲間

春の集中・奥秩父飛竜山、上信越・三坂峠～白砂山～苗場山ほか

◎わらじ NO. 473 1995. 8 B5 32P わらじの仲間

赤谷川熊穴沢七段の滝沢、足尾・庚申川本流、白神・暗門川フカゲ沢～赤石川ヤナダ
ケ沢～滝川西の沢～真瀬岳、北海道・ボンクワウンナイ川ほか

◎わらじ NO. 474 1995. 9 B5 26P わらじの仲間

朝日・三面川竹の沢中の俣沢、荒川東俣沢左沢、二口山塊・大行沢・二口沢小松倉沢、
奥利根・水長沢文殊沢～樽俣川下降、北ア・金木戸川小倉谷～打込谷、川内・中杉川
ほか

◎逍遙 NO. 50 1995. 7 B5 25P 逍遙溪稜会

阿武隈川支流湯川～烏川下降、奥秩父・ヌク沢左俣右沢、春の集中・奥秩父和名倉山、
大菩薩・丹波川小室川谷、奥多摩・小坂志川本谷、大山戸沢、峰谷川長久保沢、那須・
苦土川大沢右俣、御坂山塊・四十八滝沢ほか

◎逍遙 NO. 51 1995. 8 B5 12P 逍遙溪稜会

徒渉訓練・丹波川、三面川溪流釣り、レスキュー訓練・長久保沢、谷川・東黒白毛門沢、
丹沢・中川川悪沢、小川谷廊下ほか

◎逍遙 NO. 52 1995. 9 B5 28P 逍遙溪稜会

谷川・ヒツゴー沢、上越・清津川釜川左俣、谷川・足拍子本谷、朝日・八久和川本谷平
七沢、小国～平岩山～大朝日岳～古寺鉱泉、皿湊沢～芝倉沢下降～八久和川、
奥秩父・大常木谷ほか

◎通信・植村冒険館 NO. 4 1995. 8 B5 6P 植村記念財団

仲間が語る植村直己ほか

会報

◎とまのかぜ NO. 2 1995. 6 B5 271P 童人トマの風

無雪期の山 飯豊・内ノ倉川伊蔵沢、頼母木川足ノ松沢、五頭連峰・三階滝沢、平ガ岳
大白沢オオハゲ沢、大雪山縦走、早池峰山縦走、栗駒山産女川、神室連峰・大横川、虎
毛山塊・皆瀬川、二口山塊・二口沢、吾妻連峰大倉深沢、足尾山塊・庚申川本流、大菩
薩連峰・大黒茂谷、奥多摩・小雲取谷、頸城山塊・笹ヶ峰～火打岳、北ア・五色ヶ原～黒
部湖～赤牛岳～双六岳、南ア・甲斐駒ヶ岳ほか、

雪の山 南会津・荒海山北西尾根、谷川連峰・白毛門岳～笠ヶ岳、八甲田連峰山スキー、
岩木山、八幡平・秋田駒ヶ岳、鳥海山、船形連峰・船形山山スキー、出羽三山・月山～
肘折温泉、北ア・蓮華温泉山スキー、北ア・白馬鍵ヶ岳ほか

追悼・吾妻連峰遭難パーティ/故栗原一恵さんと仲間たち

1994年山行一覧

新人紹介

以上閲覧したい方は本図まで

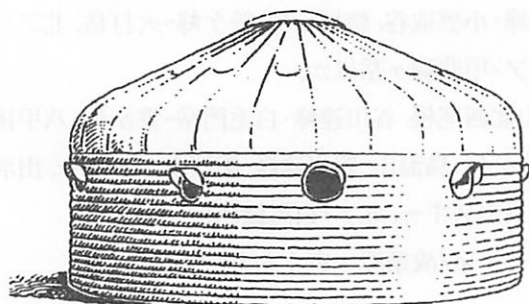


《編集後記》

前編集長のM氏より参考になればと友好団体の会報&年報を見せて頂き、見た感想としては、やはり良くできているなあと云う事と文集も山登りと同じで、情熱と気力（あと予算カナ）が必要な気がしますね。……そろそろ編集者の交代の時期かな…。

それと友好団体の文集を読んでいて海外遠征の記事があり、シャモニー、ランデックス、ミディ南壁と有り、見てみると昔の記憶が蘇ってきて、またまた私の良からぬ虫が頭をもたげてくる感じがします。内の会も海外遠征なんかしてもいいんじゃないかなと思ってしまいます。会としてでなくても個人で海外の山に行ってくるだけでもかなり考えが変わってくると思います。いつかは？では無く具体的に考えなければ夢は夢で終わってしまうと私は考えます。その為には現役の活躍と今回入った新人達の活躍次第だと思いますけどネ……………。

（編集長）



季報[R&V]第18号 発行1995年 夏号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-05茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷

